

【翻 訳】

自然科学のようになれない社会学

—— アメリカ社会学の制度分析 —— (戦後部分)

ステフエン・ターナー, ジョナサン・ターナー 共著
久 慈 利 武 訳

第3章 新しいオプティミズム：第二次世界大戦後のアメリカ社会学

【梗概】第二次世界大戦後のこの時期——1946年から1960年——は社会学の黄金期の舞台を用意した。その時期は新しい学問リーダー、新しい水準の研究資金給付、資金給付の新しい源泉、(1950年代半ばの需要の鋭い落ち込みのあとの)社会学への学生の関心の持ち直し、理論と方法と実践を調停しようとする努力の更新によって特徴づけられる過渡期であった。

ニューリーダーの簇生は専門職の人口統計上の結果である。つまり第一次世界大戦以前にPh.D トレーニングを受けた世代の死亡や退職につれて、大恐慌期のPh.Dの粗製濫造が埋めることができない空白を作り出した。そのうえアイヴィーリーグ大学が研究志向大学として自己主張し始めるにつれて、このポジションが作り出された。

アイヴィーリーグ大学のこの盛り返しの物質的基礎は私的財団による資金給付の新たな波であったが、財団事務官とアカデミクス選良の旧来のネットワークは、アカデミック研究の連邦政府による資金給付の劇的な増加に直面して、その比重を後退させた。公的資金とピア審査を含むこの移行の開始は1950年代にきわめて顕著になった。

計量的社会心理学と機能理論の登場はこの時期の大きな知的な達成であった。測定と計量統計分析の重視は数十年の間に構築され、代替アプローチを次第に周辺に追いやった。方法論論争の波及は大きくなかったため、この支配は少なくともしばらくは「無血」クーデタであるようにみえた。もっと驚くのは、機能理論と計量的方法を新たに重視した明らかな調停——ハーヴァード大学でのParsons-Stouffer、コロンビア大学でのMerton-Lazarsfeldによって大いに促進された調停——である。しかしながら、理論と実践の関係にかすかな不協和音も見られた。だがこれらの問題は1960年代、1970年代まで破裂することはなかった。実際パーソンズのような理論家は、社会学が医学部や経営学部で影響力を広げるのに理論と調査というツールを利用することに賛意を示した。

組織的には、社会学は成長し始めた。授与される学位の数は初めは乱高下したものの、教員職創出に重要な資源を提供するようになり、1960年代に近づくにつれて上昇に転じた。ASAは、社会学をもっと大きな、もっと強力な、もっと結集した専門職組織にすることに對する不平の渦巻く中で劇的に会員を増やした。しかしながら、次章で述べるように、そのような野心は続く10年間の資源の大量流入によって圧倒された。つまり急激な成長と分化は知的な統合と組織の結集を不可能なものにした。理論、方法、実践、批判間の潜在的な緊張点は各々が新たな資源を集めるにつれて、再び表面化し、新しい下位領域、雑誌、個別分野学会の登場は続く数十年に把握できないほどに加速した。

序論

戦後の状況はこの時期に特有のアカデミック人口統計とある種のリサーチ所産への特有の需要過剰によって大いに影響を受けた。人口統計の観点から見ると、大恐慌の開始から戦争の終結までの15年は再生産過程を実質的にカットオフした。ジョブは希少で、シカゴのような社会学科でも、最良で最も素晴らしいジョブはアカデミックなポジションよりも政府のそれであった。だが例外が興味深い。サミュエル・スタウファー、デヴィッド・リースマン、アーノルド・ローズ、ウィリアム・セウェル、ポール・ラザースフェルド、タルコット・パーソンズ、ハーバート・ブルマー、ロバート・マートンはいずれもこの時期に活躍した社会学者になった。戦争終結までに、彼らの前世代のリーダーが退職を迎えるか間近であった。

ギデングスは第一次世界大戦前の10年間(彼はそのとき40代後半から50代前半であった)にPh.Dの教師として沢山の弟子を育てた。スチュアート・チェイピン、ウィリアム・オグバーン、ジョン・ギリン、フランク・ハミルトン・ハンキンズ、ハワード・オーダムら弟子達はPh.Dの上昇が止み、アカデミックジョブが減少する時期に彼らのキャリアを築き上げた。1930年代には、多くの教員が給与のカットを余儀なくされ、手に入るポジションはほとんどなかった。1930年と1945年の間はASSの会員はほぼ半分まで低下した。戦後の復員兵援護法がこの趨勢を劇的に変えたとき、上記のリーダー達は名誉教授か退職間近であった。

社会学の入学者が増えるにつれて、新たな人口統計的な資源が手にはいるようになったが、その機会に反応する能力は低減していた。結果として、幾つかの尋常でないリクルートパターンが観察された。戦後は社会学の急成長の始まりを印したから、このリクルートパターンは社会学に有意な結果をもたらすことになった。

コロンビアとハーヴァードのような大学は1940年代に前記の教員を入れ替え、社会学の

既成の学問ヒエラルキーを超えることによって拡張を図った。例えばコロンビア大学では、チャドックのポジションはロバート・マートンとポール・ラザースフェルドで分割された。マートンは32歳で正教授になり、ロバート・マキーバー¹によって後押しされた。ラザースフェルドはこのときは社会学者ではなかったが、社会学の学問の系譜と離れた人物、ロバート・リンドによって後押しされた。マートンのハーヴァード出身の背景は彼をギデングスの弟子たちによって作り出された基準に照らしてアウトサイダーにしたが、マキーバーはその基準に根本から敵対していた。ハーヴァードでは、生物学者でビルフレド・パレートの信奉者で、キャンパス・ブローカーとして絶大な影響力を持ったヘンダーソンの役割によって状況が異常であった。ヘンダーソンは社会学の任命権を握り、ボストンの社会エリートであるジョージ・ホームズが社会学のポジションに指名された*。ホームズはヘンダーソンのパレート・サークルとの関わりとウェスタン・エリクトリック社研究に参加したことを除いて既存の社会学の伝統に染まっていなかった。1931年に社会学部のメンバーになり、戦争開始時にはまだ助教授であったタルコット・パーソンズは、ハーヴァードの偏狭な環境を利用し、ハーヴァードの貴族階級に不評であったソローキンを出し抜いて新しい学科、社会関係学科を創設した。

あのシカゴ大学ですら、自らを再生産するのに苦労していた。レオ・グッドマンは、社会学を教えることを期待されて統計学者として招聘された。その著『孤独な群衆 (1950)』で有名なデヴィッド・リスマンは学部専従カレッジにリクルートされ、コミュニティ・ファミリー研究センターに関わり、カンザスシティのコミュニティ研究に従事した。アカデミック・ポジションを獲得したヨーロッパ人の中には、ハンス・ガースとアルフレッド・シュッツがいた。

上記のものが最良の大学に補充されたことによって引き起こされたひとつの問題は、社会学の理論的、方法論的伝統の脆弱さであった。社会学の最初の学位が贈られて50年も経つのに、素人が社会学の中心ポジションにつくなんてことがどうして起こりえたのか。この質問はみかけよりはるかに複雑であり、他の問題を考慮することによってのみ答えることができるものである。主要な社会学科の大半は中西部ないしは南部にあったという事実がひとつの中心的理由である。戦間期及び程度は下がるがその後も、アイヴィーリーグ大学の教員は、

¹ マキーバー自身はギデングスが退職後コロンビアのチェアマンに就任した非社会学者であった。彼はコロンビア大学出身者で、彼がプロジェクトの多くの評価を行ったニューヨーク慈善事業家の厚い信頼を受けていた。彼はソローキン、エルウッドのような方法論に異議を唱える者と心を通わしていたが、親密な仲ではなかった。彼の『社会的因果性 (1942)』は従来の社会学方法論の背後にある科学哲学、特にギデングスとその弟子のピアソン主義に批判的な文献である。

* (訳注) ホームズの採用は1946年でヘンダーソンは1941年に死去しており、著者達の記述は明らかに間違っている。Nichols (2006) によるとマートンを推すパーソンズが仲の悪いソローキン、ツインマーマンのタッグに押し切られたのが真相である。

社会的に適切なアカデミック制度を少なくともくぐり抜けた経験のない中西部人、西部人、南部人には実質的には通じなかったのである。上記の制度のスノビズムは特定の形態を取った。非公式な割当制によって依然規制されていた外国人やユダヤ人は、州立大の卒業生よりも上記の大学の地位に熱心なリーダー達にとっては脅威にならなかった²。結果として彼らは他のリージョンの内部出身者より得をしたのである。

リサーチの観点では、資金給付の戦後の拡張は社会学者の供給と大きなチーム運用の研究者の需要にラグを作り出した。この時期に周辺から社会学の中央に上昇した人物のほとんどすべては有意義な資金給付を受けたりサーチに基づいてそれを行った。資金給付の雰囲気の本質は変化のストーリーの主要部分である。尋常でない需要状況の結果は、衝撃的なもので、これまで築かれてきたアカデミックな伝統、特に1930年代の社会学を依然支配していた改革精神を破壊するものであった。

財団と新しいアカデミック・ヒエラルキー

戦後直後の財団と社会学的専門職のもちつもたれつとの関係は、1930年代初期に存在したそれと全く似ていない。社会学そのものの状況と全く別に、上記の新しい関係はアメリカのアカデミック・ヒエラルキーにおける大学の格付けに重要な影響を及ぼした。変化の両過程は戦前にルーツを持つが、変化がいつ始まったか正確に日付を記すことはできない。コロンビアとハーヴァードは戦後期の財団による新しい資金給付の主要な受益者であった。ハーヴァードは全国の政治エリートとボストンの名門出身者のカレッジから、アカデミックな大学で最良の院生を競う野心的な総合大学に変貌した。

アイヴィーリーグの変貌は今日でもまだ完了していない複雑なストーリーである。19世紀末までにジョンズホプキンス、コロンビア、シカゴ大学で確立された大学院支配のモデルが、学部生の養成を主要な使命と見なしていたアイヴィーリーグの諸大学によってもゆっくりと採用されつつあった。そのうえ彼らは、教授はすでに裕福であるはず、裕福でない者も彼らの就任の威信をふさわしい裕福な花嫁との結婚で変換するはずという前提に立ってしばしば薄給であった。1920年代、1930年代のハーヴァードはまだ部分的にアカデミックな基準だけでなく社会的な基準によって支配されていた。つまり出版は尊敬されるには重要ではなく、戦間期の社会学の学術出版物の主要な乗り物は「二流の名誉」とみなされた。ハーヴァードを変貌させた変化のルーツは世紀の変わり目に学長を務めたチャールズ・エリオット(Charles Eliot)であった。資金給付は変化し、大学の財政部分にとって重要であった。1920

² マキーバー、ソローキンは外国人であったし、テオドール・アベルはポーランド人、マートンはユダヤ人ということが上記の教員が要求した都会イメージを培った。

年代まで、ハーヴァード大学はハーヴァードの校友と卒業生が代表するニューヨーク・クラブサークルから出る財団資金に大いに親密な関係を示していた。産業労働者の危険(industrial Hazards)に関するロックフェラー・グラントによって大いに資金給付を受けるようになった1930年代半ば以降のハーヴァードの変貌は、ハーヴァードの社会学に、究極的には社会学部門の全国的格付けに影響を及ぼし始めた。

州立大学には(戦前と戦後で)より大きな連続性が見られた。1930年代半ばのトップ5の社会学部門の2つは、中西部の州立大学、ウィスコンシン大学とミネソタ大学であった。ギデングスの弟子によって席卷されたミネソタは、大恐慌の削減に比較的影響を受けない農村社会学のリーダーシップなるものを産出していった。チェイピンの弟子の間では、T. リン・スミス(Lynn Smith)、チャールズ・ライブリー(Charles Lively)、B.O. ウィリアムズがおり、彼らはルイジアナ州立、フロリダ、オハイオ州立、ミズウリ、ジョージアの学部長を務め、統計が得意な社会学者を採用した。しかし戦後期の変化はこれらの学部(その幾つかは合衆国最大の州に属していた)を地区で重要な、あるいは第2、第3位のドクタープログラムに格下げした。戦後期、これらの学部は新制のPh. Dの多くを吸収拡張したが、相対的に見て威信の点では低下した。

別の資金給付を受け、大学全体とは別な関係を持つユニットに組織された農村社会学は、1936年に雑誌*Rural Sociology*を創刊して以後、社会学の他の部門から自ら分離した。1930年代の農村研究の支援の源泉は社会学の他の部門ほど迅速には拡張せず、今や時代遅れのパトネジ乗り物の観点から活動していた。つまり特別な訓練を受けた研究人員による大きなスタッフを必要としない小プロジェクト。その上政治的には常に弱体な農学部社会調査活動は戦後直後攻撃にさらされた。

1930年代に農業研究ステーション・システム下に存在したグラントシステム、より正確には研究支援はワールド・サイエンスでは馴染みのモデルであった。ステーションは実際は研究トピックを選択する大いなる自律性を持つ広く実用的な目的に奉仕する研究施設であった。そこには利用できる限られた資源(資金)とその配分を支配するサーヴィス倫理の制約があった。そこにはこれらの研究施設の資金源(部分的に連邦政府と州政府)という政治的制約もあった。この種の研究施設では社会学は補助的役割を担い、しばしば研究ステーションのねらいに非常に密接に結びつくことによって、そして彼らの資金給付の政治的現実を尊重することによって自分たちの価値を証明しなければならないと感じていた。上記の無形の制約は時折非常にシビアであった。自然科学では、この研究施設支配のモデルは大いに批判された。特に科学への戦後の資金給付がとる形態をめぐる交渉の期間中は。科学者によってなされた議論は、民間財団の実践の中で成長してきた研究提案システム(research proposal

system) は巨大な州の研究施設よりも研究者の創造性と学問の自由の保持に向いているというものであった。

もちろん財団との関係は制約のあるものだった、ただし多様なあまりルーチン化されない仕方だ。農村社会学者が彼らの研究のメリットに関して政治に過敏な農学部長、実験ステーションの所長を説得しなければならないところでは、グラントの種類は社会学者が財団事務官に研究を支援するよう説得することを要求した。だがこの厄介なタスクはさまざまな新しい環境によって緩和された。それは、パトロンと社会学者双方が価値を見いだす研究モデルから次第に生まれてきたものであった。時間がたつにつれて、似た精神を持った財団事務官と社会学者の共同体が生まれた。

アカデミックな社会科学において有力な勢力としての財団登場のストーリーは複雑であり、代替解釈を許すものである。我々が見てきたように、ロックフェラー財団と社会科学との初期の関係は、自分たちに期待されているものを謎解きしなければならなかった社会学者にとっては、押しつけがましく高圧的なものであった。ニューヨーク財団のような大きな財団職員として働いたことのある、社会学者の「端くれ」でもあるビアズレイ・ルムル (Bearsley Ruml) のような人物がロックフェラー仲介者の役割を果たすようになって、関係の性格はがらりと変わった。財団を相続した億万長者と直接つながっていた人物の死後まもなく、この種の仕事はそれ自身のヒエラルキーと、業績の種類、競争の強制を持つキャリアとなった。カーネギーのような小さな財団は、それが支援する仕事の斬新性を自慢し、そうするためにプロジェクトを束ね、プロジェクトを遂行できる候補者を集める能力を持つ人物を雇う必要があった。1920年代のシンプルマインドな目標では十分でなくなり、今では財団事務官の評判をとるのは組織化の成功であった。また評判を落とすものは、財団を公衆の当惑と批判にさらすことに給付資金を使うことであった。SSRC 社会科学^{リサーチ}研究協議会のような組織や専門人の登場は、財団を歓迎せざる規制、批判、政治の吟味から守るという重要な目的に奉仕した。長年カーネギー・コーポレーションの代表であったフレデリック・ケッペル (Frederick Keppel) は彼らを「緩衝」と呼んだ。

財団事務官として成功するためには、達成されるものと達成する人物をかぎ分ける能力が要求される。社会調査の場合には、成功には SSRC の活動の周りに発展した「エスタブリッシュメント」との親密な個人的な関係が必要である。裁量、良き判断、健全な助言を手に入れる適切な範囲の個人接触が財団事務官の善良な仕事にとって肝心なものである。同じ特性は、ハーヴァードやコロンビアのような慈善寄付に依存した経営や大学にとっても重要である。結果として大学と慈善組織の間の人事交流がしばしば見られた。ロバート・リンドはそれぞれの組織で働いた経験を持つ。ロックフェラーの人間であるビアズレイ・ルムルはシカ

ゴ大学の学長になった。1940年代、上記の種類の交流は増大した。特にハーヴァード大学とニューヨーク財団の間で。大酒飲みで、財団やSSRCにも友人にも遠慮のない、学問とは大体において距離を置いているサミュエル・スタウファーのような社会学者が慈善コミュニティにとって主要な「インフォーマント」になった。上記の「ブローカー」の役割は新興のパトロネジ・システムにとって重要であった。1940年代の財団世界の競争の性格はかつての財団活動のゆったりしたペースに取って代わった。そのうえ社会科学のグラントを受ける候補者は比較可能な他の財団や政府、企業という代替的資金源を持つことになった。

上記の機関での個々の研究プロジェクトに資金を与える決定は高度にパーソナルであって、公式のピア審査のような系統的なメカニズムはこの機関によっては採用されず、結果として機関の新興ビュロクラートとアカデミックないしサーベイリサーチ研究所の請負人との間に強い個人的な絆が生まれることになった。この絆は今度は研究アイデアが発展するのを許し、彼らの研究資金が社会的研究者の吟味とビュロクラートの最小限の難癖では認められることを許すことになった。

プロジェクト・グラントのコンセプトは1930年代の産物である。つまり1920年代のロックフェラーの慣行が大学内のコミッテエや研究所職員の裁量で分配される不特定の研究やビル建物のような資本の改善に比較的制約のないグラントを与えた。対照的に、プロジェクト・グラントの使用は財団の手に権力を戻し、財団のためにより多くのスタッフとより大きな卓越した技能や知識を要求することとなった。その方法は1930年代半ばにロックフェラー財団の実験生物学グラント・プログラムの長であったウォレン・ウィーバー（Warren Weaver）によって初めて用いられた。社会科学はそれに10年遅れて追随した。『アメリカンジレンマ（Myrdal 1962）』のアイデアは一部はプロジェクト・グラント、一部はコミッション（委託）であった。それはアカデミクスを使用した大学にベースをおかなかつた。研究のディレクターで報告書の執筆者であったグンナー・ミュルダールはカーネギー・コーポレーションによって選ばれ、コーポレーションは大学に代わるサポートと管理監督業務の多くを与えた。

慈善共同体内にはプロジェクトシステムの効果に関してかなりの意見の不一致が見られた。1940年代の後半の経験のあとで、多額のお金がアカデミクスと財団事務官のごく小さな共同体に給付される危険性の存在が認識された。財団への新規参入者のなかで最大のフォード財団はそれを次のように観察した。

財団に対するプロジェクトを引き受ける大学教授は、財団事務官、大学の管理者、財団事務官がその助言に耳を傾ける専門的学会、研究カウンスルの仲間との連続的交渉の網の中に捕らえられている。要するに彼は一種のアカデミック政治に巻き込まれ、教育

研究調査の実施の代わりに、次年度のグラントのためのキャンペーンに多大な時間を費やしているのである (Ford Foundation 1949: 109-110)。

学者生活の性格はかくして劇的に変化する。専門職仲間の明示的で頻繁に確認されねばならない是認への依存が学者の競争の新しい条件となる。しばらくすると競争は貴重な接触を持つ仲介者と資金給付の代替源泉を持つが、自分自身の好意的待遇と引き替えに、他者のプロジェクトの審査を進んで交わす研究者の手を強化するのである。財団のねらいを遂行する個人の能力に関する情報と判断の交換にかなり基礎をおいた友好関係のネットワークが社会科学のエスタブリッシュメントのメンバーと財団事務官の間に生まれた。

戦後期に上記のつながりは戦時中に威信が高まった「基礎的」社会科学の支援で活躍した。1920年代と1930年代の研究資金の混合モデルからの進化はゆっくりではあったが、決して完成しなかったが、変化は劇的であった。研究のスポンサーの数は増え、その結果ロックフェラースタッフによる事実上の独占は消滅した³。上記の状態はほんの短い期間だけ、おそらく第二次世界大戦後の5年間だけ続いた。財団事務官と比較的若い野心的な社会学者達の共同体は、大きな共通の任務の共有感覚のゆえと、幾つかの財団が進んでこれらのビジョンに財政援助したので、この期間に成功の果実を得た。しかしながらこの時期には、権力はかなり中途半端に分配された。財団事務官は信頼を置く社会学者の個人的助言に依存したけれども、彼らは非常に権力を持つ人物であり、グラントを受け取る者とグラントが与えられるべき条件に関して非常に個人的判断を下すことができた。ある有名な事例のなかで、財団事務官は H. スチュアート・ヒューズをハーヴァード大学ロシア研究センターの長として政治的に容認できないと声明を出した。タルコット・パーソンズもそのセンターの理事の一員であったハーヴァード大学の理事会はそれに従った。他の事例では、財団は管理者の任命の提案の受け入れに関して指導的な東部大学理事達による相談に静かに応じた。財団のリーダーシップは「小売り慈善事業」としてネガティブに特徴づけられるものに従事することには気が進まなかったが、研究プロジェクトの提案を査定する際、指導的社会学者とアカデミックの管理者との個人的なつながりに依拠せざるを得なかった。

このシステムは当初は大規模な私立大学にだけ恩恵を与えた。公立の大学は資金に与ることができず、試練に反応できるだけ十分に意思決定することができなかったが、自然科学の

³ 戦後期の SSRC アピールのパーソンズの草稿への注釈の中で、サミュエル・クラスナー (1986: 5) は SSRC のアカデミック・リーダーが資金給付源泉の「多様性」に記している神秘的重要性に意見を述べている。ロックフェラーの分配係との彼らの体験に照らしてみると、これはほとんど驚くほどの内容ではなく、後続した多様性の解放効果は正しい。クラスナーが指摘するように、パーソンズはそのような多元的見解を保有していなかったことが指摘できよう。

グラント給付のパターンが十分に確立されたときになってようやく、彼らもそれができるようになった。シカゴ、ハーヴァード、コロンビアは最も競争のできる大学となった。社会学部門を持たないあるいはもっと慎ましい学部しか持たないアイヴィーリーグ大学のような似たアドバンテージを持つ他の大学は、旧来の学科にとって重要な競争相手となるかまたは社会調査を遂行する研究所を新たに創設した。従来の研究形態の登場は1950年代半ばまでにアドバンテージを食い尽くし、1960年代の経験的調査のめざましい簇生に舞台を譲った。しかしながら、このリサーチは、幾つかの重要な点で財団の「共同体」とは対照的な仕方です資金給付がなされた。ピア審査のシステムの下で連邦政府機関が次第に活躍するようになり、支配はアカデミックスの手に移ることになった。その上、政府資金給付源泉の多様化は、学問内のさまざまな学閥が資金給付ホームを見つけ出すことを可能にした。

過渡的な組織形態

起こった変化を理解するには、社会学における「パトロネジ乗り物」の簡単な歴史に触れる必要がある。1860年代以降、問題を研究し診断し、解決策を提案する委員会というアイデアが社会学者が関わる研究のための中心的パトロネジ乗り物であった。標準的形態は次の通りであった。公開討論で同定されたある「問題」が公的か私的な研究団体（some investigative authority or body）に付託された。戦時中に行われたアメリカのジレンマ研究はある意味でこの古いタイプのプロジェクトの最後のものではあった。その歴史は社会学者と財団の関係の変化に我々を釘付けにするために用いられる。プロジェクトは、ある基礎的社会問題の研究に、若きアーノルド・ローズ、エドワード・シルズ、どこにでも姿を現すスタウファーのような幾人かの社会学者を雇った。それは農村社会学者にとってタブーであった問題のひとつであった。それは合衆国農務省の社会調査を急がせ、社会科学が米国科学財団（NSF）に加わる障害として働いていた。アメリカのジレンマ研究はアカデミックスによってでなく、アカデミックスにそれを行ってほしいと思う財団事務官によって考えられたものであった。もちろんこのときまで財団事務官が意見を聴くことのできる著名な助言者のネットワークが存在した。この場合彼らは意見を聴かれたが、彼らが尋ねられたことによって決して縛られることはなかった。コーポレーションはロックフェラー財団ほどリッチではなく、発展の途上にあつた。年長の事務官の一部は寄付者の本来の意図に関して権威じみた発言をしたが、この数は次第に少なくなった。結果として目的をめぐる内部の対立は新しい事務官の大きなイニシアティブで解決することができた。この新しい事務官は自分自身の慈善的アジェンダを設定し始め、慈善的アジェンダに合致するスタッフを雇い、プロジェクトのためのアイデアとグラント申請者の長所に関して比較的没利害的助言を与える、信頼が置けるアカデ

ミックスと信頼の絆を作り出した。

研究の背後にあるアイデアは財団の管財人ニュートン・ベーカー (Newton Baker) であった。彼はクリーブランドの前市長であり、ウッドロー・ウィルソン政権下で戦争長官 (secretary of war) であった。ここに社会的つながりが例証的である。フレデリック・ケッペル (Frederick Keppel) はコロンビア大学の男子の学部であるコロンビアカレッジの学長を歴任し、戦争長官ベーカーの副官として仕えたことがあり、1923年以來カーネギー・コーポレーションの会長を歴任した。フレデリック・ケッペル二世は第二次世界大戦中、フレデリック・オズボーン将軍の副官として仕え、ハーヴァード大学の理事となった。このコーポレーションは伝統的に黒人のカレッジを支援してきていたが、ケッペルとベーカーはもっと劇的な何かをしたいと望んでおり、人種問題の包括的研究というベーカーのアイデアはケッペルの心を捕らえた。彼らはこの課題に取り組みそうなアメリカの学者を想像してみたが、「黒人も白人もアメリカ人はともにあまりに多くの偏見を持っており、客観的で新鮮な研究ができない (Southern 1987: 4)」と結論し、帝国主義的利害を持たないヨーロッパ出身の学者で、合衆国に暮らしたことがあり、1929-30年のロックフェラー・フェローシップの経歴の持ち主グンナー・ミュルダールに白羽の矢を立てた。ミュルダールは渋ったが、ミュルダールを先に合衆国に招聘したプログラムの代表であったピアズレイ・ルムルがスウェーデンのミュルダールの元を訪れ、受諾するように説得した。ミュルダールの要求した代価は高かったが、研究そのものには非常に気前よく研究資金を融資した。

ミュルダールの選抜に対してアメリカの学者の間には不満があった。というのは、ミュルダールの見解は基本的態度の相対的な不変性 (不易性) を強調し、これらの態度に直面しての「社会学」の跋扈を拒絶する人種関係の主流とは異なっていたからである。当時の態度研究者やハーバート・ブルマーの新しい社会心理学は「行為に対する伝統的な価値の影響の相対的な欠如を力説し、社会行動の規定因子は個人がその中に自分を見いだす集団環境の潜在的に操作可能な特徴である」と述べた。態度の融通性への信念は彼らの研究のひとつの公認のものであり、態度に関心を払うサーベイ調査は行為に対する可変的な態度のアイデアに依拠していた。かくしてミュルダールの著書は人種関係の伝統に対するあからさまな敵対にも拘わらず、潜在的に受容するオーディエンスを持った。そのうえミュルダールは個別のトピックに関してレポートするようにアメリカの年少の社会学者の多くに協力を求めた。彼は年長の社会学者とも同じ意図を持って待遇した。報告書は数十の社会学者から提出され、カーネギー・コーポレーションは彼らとそのアメリカ人「研究助手」に十分な謝礼を払った。

研究の執筆形態は過渡的なものであった。研究のスポンサーであるカーネギー・コーポレーションの主要なねらいである編集と「アメリカ人民衆の合理主義的平等主義的理想と黒人に

関わる態度の実際間のジレンマ」というテーマを追跡する分析研究の混合がそれである。研究には、南部の黒人の状況の歴史、経済学的分析、人口統計学的分析、制度的分析が含まれた。議論の要諦は態度に関するものであった。ミュルダールは1930年代に発達した人種態度の計量的文献に気づいていたし、質問紙データの価値を否定しなかった。しかしながら、本書の大半は実際に実在したものとしての南部の人種イデオロギーの理念構造の非公式な分析である。実際ミュルダールは差別（「態度の客観構造」）の概念に賛成して「態度」と「偏見」のタームの使用を回避した。ミュルダールが自由に理論的革新を行ったと感じ、さまざまな方法を用いたと感じた度合いは、アメリカユダヤコミッテーターによってスポンサーされた反ユダヤ主義の同時代研究（『権威主義的性格（1950）』の題の下に出版された）にも等しく現れている。

射程範囲の広いソフトな方法の研究が次の数年間財団によって支援された。但しこれらの資金はある基準を満たす学者にのみ利用できるものであった。つまりそのプロジェクトはニューヨーク財団コミュニティと社交的つながりがあり、財団事務官指名の有能な個人リストに掲載されている人物によって指導されているプロジェクトに限定されていた。司法修習を受けた弁護士であり、かつては法学部の教授であったデヴィッド・リースマンはこのシステムの一人の主要な受益者であった。リースマンの『孤独な群衆（1950）』は、編集するねらいと非公式な印象主義的手法の混合であるカーネギー・プロジェクトのもう一つの成果であった。しかし財団事務官と指導的社会科学者の共同体は上記の著作の長所に関して意見が分かれた。SSRCによって支援された社会学者と行動科学者の多くはこの種の成果に積極的に敵対した。

1950年代に入って、ミュルダール、リースマンによってなされたタイプの財団支援のリサーチは重要性が低下し、サーベイリサーチと計量的に定位した社会心理学リサーチが重要性を増した。サーベイは多様な目的とパトロンに仕えることができる新しいタイプのパトロネジ乗り物であった。古典的なサーベイリサーチはコロンビア大学応用社会研究所（BASR）のラザースフェルドによって行われたそれであったが、彼のプロジェクトのパトロネジ構造は例外的なものであった。ラザースフェルドはロックフェラー・フェローとして合衆国にやってくる以前にオーストリアで沢山の心理学タイプのサーベイリサーチ研究を行っていた訓練を積んだ数学者であった。ロックフェラー・フェローは1930年代にヨーロッパの難民のアメリカでのアカデミックキャリアを開始するプログラムであった。彼が合衆国に留まる決意をしたとき、1920年代に非アカデミックな、主として心理学的研究形態として急速に発達していた市場調査（マーケットリサーチ）を行い続けた。ラジオ聴取パターンを研究するために1935年にプリンストン大学に大きなグラントが与えられたとき、ラザースフェルドはプ

プロジェクトの指導者として従事した。

ラザースフェルドは彼が研究資金を見つけることができたサーベイプロジェクトを実施するために BASR を創設した。彼は最初、一人の野心的な学長を持つニューアーク大学と提携を結んだ。1941 年に彼は研究所をコロンビア大学に移し、新しい取り決めを結んだ。その取り決めは斬新なもので、ラザースフェルドはのちに至る所で模倣された研究所の組織的側面を彼の最大の業績のひとつと見なした。プロジェクトそのものは 1940 年代 50 年代の研究の全盛期にかなり特有のものであった。プロジェクトの範例的な種類のもは、一部の企業の個別関心事に合わせた高度に実用的目的を持つサーベイであった。それはラザースフェルドが同時にアカデミックな研究プロジェクトが行えるように、物質的ヘルパーと有能なヘルパーをあてがうことができるほどの、十分な額の資金が追加された。これはある意味では斬新なアプローチであった。社会宗教研究所 (ISRR) のそれとよく似たこの仕事はアカデミック (社会学的) であると同時に、パトロンの実用的な目的にも奉仕するように設計された。ラザースフェルドは 2 つを分離した。パトロンのために報告書を生産し、アカデミックな聴衆のためには、著作を産出した。著作は典型的には研究所の所員であった参加者数人と共著の形をとった。彼の弟子は彼の指導下でデータ分析する博士論文を産出した。

この戦略はじきに消滅する高度に個別的な歴史条件の下でのみ可能であった。アカデミックな著作を著すのに必要な資金は実際には過剰価格をつけたサーベイプロジェクトをスポンサーに売り込むラザースフェルドの能力にかかっていた。非アカデミックな競争相手がラザースフェルドに支払わねばならなかった価格を切り下げできるまでサーベイリサーチビジネスが進歩するやいなや、この種のプロジェクトはもはや市場化できなくなった。そのうえそれがその最盛期の間、資金給付はラザースフェルドが契約を結びアイデアを売り込む能力と資金給付の企業源泉に彼が近いことに依存していた。CBS のフランク・スタントン (Frank Stanton) との彼の長いつきあいと広告ビジネスのリサーチサイドとの彼の密な結びつきが彼の成功にとって重要であった。ラザースフェルドの行ったのは企業リーダーとの昼食会のトークを交わすことであった。これは無限の機会が存在する活動であった。聴衆の一人が彼自身の会社で起こった似た問題で彼に意見を述べたときに、ラザースフェルドは彼との昼食を用意し、それを研究するためのリサーチプロジェクトに資金を出すように彼を説得に努めた。

ほとんど他者にはまねができないけれどもこの戦略は大いに成功を収めた。ラザースフェルドはリサーチ、アイデアの思いつき、組織、セールスマンシップというすべて他者にはまねできない才能を併せ持っていた (Sills 1987; Barton 1982)。いずれにせよ、他の社会学者も企業の仕事を行う機会を持っても、ラザースフェルドのように企業権力の中核近くに位置

した者はほとんどいない。しかしこの形で BASR システムは繁栄することはできなかった。例えば、それはかつて BASR のディレクターであったチャールズ・グロック (Charles Glock) の下のカリフォルニア大学で再生産された。しかしグロックのユニット、1950 年代、1960 年代に多くの州が設立したユニットは大体において商業ワークによってでなく、連邦政府のグラントによって支援された。ラザースフェルドは次第に商業ワークはあまりにトラブルが多すぎると決断し、ほとんどもっぱら連邦政府のグラントに切り替えた。1950 年代末までは、上記のユニットのすべておよびアカデミックな社会学部の個々の社会学者は連邦政府のグラントを求めて競い合った。

この時期に他に 2 つのサーベイリサーチ組織が設立された。戦争は士気に関する 3 つの政府関連のサーベイユニットの起源であった。それぞれはやや異なった方法スタイルを取り、方法に関して競い合うものと見なしていた。ひとつは合衆国軍隊の士気部門の調査ブランチ、サミュエル・スタウファーの指揮下で、ニューヨーク財団内部者フレデリック・オズボーンが監督であった。もう一つは戦時情報局のサーベイ部門で、世論調査員エルモ・ウィルソンに指揮されていた。第三のものは農務省プログラムサーベイで、心理学者でのちに指導的な組織思想家になったレニシス・リッカートに指揮された。士気は全国的な根本問題と理解された。第一次世界大戦はヨーロッパの戦争に参加するメリットに深い落胆を残した。合衆国を関与させたいという願望を共有するヨーロッパ中央のエリートとともに、ルーズベルト大統領は戦争に参加することへの民衆の支持確保と民衆の支持水準の査定に熱心であった。これは鋭い世代分裂に導いた。反帝国主義はアメリカ社会学の最も深く根ざした政治的伝統であった。年長世代の多くの社会学者、社会学者はアメリカの参戦に反対し、合衆国のために拡張された世界役割に不可避免的に後続するものと信じる保護国家となることを恐れた。チャールズ・エルウッドは徴兵反対者であったし、ジョージ・ランドバーク、ハリー・エルマー・バーンズ、チャールズ・ピアードは戦後の介入主義ムードと合衆国の介入主義世界役割の双方に声を出して批判した。W.F. オグバーン、エルスワース・ファリス、その他第一次世界大戦とその後の体験によって態度を形成した人々は上記の見解に共感を示した。

社会学の新しいエスタブリッシュメントは少しもそれを共有しなかった。スタウファーの軍隊での役割は有名だし、T. パーソンズは国際情勢を研究し始め、ヨーロッパの戦争に介入するインプリケーションを検討し始めたハーヴァード教員グループの初期のメンバーで、それへの優れた知的な貢献者として働いた (Buxton/Turner 1990)。パーソンズはサーベイ調査者同様、自己の仕事を士気の問題にくっつけようとした (Converse 1987: 160; Buxton 1985)。戦争の末年に新しい問題 (原爆投下の敵の士気に及ぼす影響) がサーベイ分析にかけられた。上記のプロジェクトの各々はその後長年にわたって参加者に重要なパーソナル

ネットワークを作り出した。上記のネットワークは社会心理学、人口統計学、統計学、「文化とパーソナリティ」の重なる領域に中心をおいていた。

戦時のサーベイ者が設立した私的なサーベイ組織にはミシガン大学の社会調査研究所 (ISR) も含まれていた。当時デンバーにあった全国世論調査センター (NORC) は戦時中ウィルソンの戦時情報局と契約しサーベイ調査を行ったが、1948年に活動を広げ、シカゴ大学と公式関係を形成してシカゴに移った (Converse 1987: 173-74)。スタウファーはハーヴァード大学に小さな社会関係実験室を設立したが、大規模データの収集には NORC のような他の組織を使用した。戦時努力の他のベテランはアカデミック部門に戻り、彼ら自身の部署で (ひとつの重要な事例では農業研究ステーションシステムで) 学際的なアイデアを追跡した。学部は大規模なサーベイを行う準備がなかったのでその始まりは小規模であった。しかしのちに述べる理由で、上記のものが 1960 年代に支配的となり現在の経験社会学の典型となる調査様式の始まりであった。

ウィリアム・セウエルがウィスコンシン大学でプロジェクトを始めた当時は、社会調査のための大学の研究資金はほとんどなかった。社会科学調査が研究のために大学内で利用できる資金給付の正当な受益者として扱われるようになったのは、大学内の数年にわたる内部政治の結果であった。連邦政府の資金は当初はほとんど皆無に等しかった。1944年の苦い選挙の間、政治的世論調査への議会の批判の結果、政府のサーベイ活動は閉鎖された (Converse 1987: 207-211.)。しかし 1940 年代後半からサーベイ活動と社会科学リサーチ一般は他の連邦政府機関 NIH (国立衛生研究所)、NIMH (国立精神衛生研究所) において復活した。社会科学は NSF から当初は排除されたが、次第にそこでも承認を勝ち得ていった。

そのキャリアが戦時マネーの巨大な注入によって膨らんだサーベイ調査者は、学問としての社会学の個別戦略の提唱者であった彼らはその最も有力な解説者となり、3つの基本要素を具体化する一連のプログラムテキストで彼らの構想を定式化した。社会学を科学に転換するという課題のための特に喫緊のアドボカシー、社会学改革の推進、社会学のための新しい目標の描写。これらのプログラムテキストの主たるねらいは、フィールドのはるかなる理論的目標でなく、研究者の身近な目標達成のための実際的条件と方法、特に測定技法改善のためのプログラムに置かれた。社会学の理論的目標の主題にはほとんど意見の一致がなかったのに、これには沢山の同意が見られた。方法論プログラムと社会学の制度改革は上記の戦略の中心でも著述の中でも分離しがたいものであった。各々は複雑な変貌を伴った。

その 1：測定の戦略的中心性

この時代の社会調査参加者の興奮の大半は、戦時の努力がそれ以前の時代とのラディカル

な分断をなしたという彼らの感覚を反映している。特にラザースフェルドはこの考えを助長し、ある重要な意味で彼は間違っていなかった。つまり 1940 年代にラザースフェルドによって遂行された類の調査は従来型社会学のものではなく、むしろその理論を「民俗心理学 (folk psychology)」に、オグバーン世代によって気に入られた相関、回帰技法よりも応用心理学から借用した統計技法や、投票行動リサーチ、市場リサーチから借用した質問紙法に依拠した一種の個人主義的分析であった。人がこの仕事をアカデミックなタームで特徴づけたいなら、「社会学に（あるいは人口統計学に）精通した応用心理学」と呼称するのがふさわしいだろう。社会学的要素は質問紙における標準的人口統計情報と階級の代理尺度の使用である。それは、オグバーンと彼の仲間が行動指標を最良して一般的に毛嫌いだした考えである、態度、発話の分析に関心を払うものだった。ラザースフェルド自身の場合は、一種の市場調査からスタートした。それは、誰かが何かをしたのはなぜかを尋ねる質問のためにウィーンで開発した「理由分析」であった。合衆国での彼の初期の研究はこのタイプのものであったが、1940 年代までに力点は態度測定に移り、彼はのちにサンプリング、態度測定等の過剰な重視だったと振り返っている (PFLW⁴: 71)。

この過剰な重視は、社会学史において、スタウファーがゾーンダイクの方法を応用しようとしたり、チェイピンがオルポートのアイデアに順応しようと必死になった先例を持つ。1940 年代までチェイピンの弟子、ルイス・ガットマン、スタウファー、リッカートからなる集団内で強い競争力学が発達していた。新しいアイデアが上記の研究者を雇っていた潤沢な資金のある大規模な戦時サーベイリサーチ・ユニットによって即座に実施に移され、実践は急速に変わった。これらの変化が来たるべきブレーク・スルーを予兆し、社会学を科学にする途が測定の改良を通じてであったと結論したのは当然であった。

RAND コーポレーションからスタウファーへの主要な戦後グラントの源泉であった測定への集中は、彼の公衆向けのプログラム声明、彼のグラント主への申請と報告にとって中心的なものであった。上記のさまざまな声明の基本テーゼは医学の発達というお気に入りのアナロジーに含まれている。

医学の歴史の研究が寒暖計や顕微鏡の用具の発明にかかっていたように、新しい社会調査は一部の人が申し訳なさそうに便利な用具と呼ぶものにかかっているし、益々そうなるだろう。質問紙ないし態度テストは便利な用具である (Stouffer, Reply to Bridgeman 1948, SAS: 6)。

⁴ コロンビア大学オーラル・ヒストリー・オフィスのアーカイブス、ラザースフェルドより

スタウファーは便利な用具の起源は社会学でなく市場調査にあることを進んで認めたが、この用具の社会学に個別目的のための使用と改良は社会学の目下最善の戦略であると信じていた。

クライアントの要求によってでなく、技術開発の内的要請によってもたらされたものとラザースフェルドがのちに主張したこの「重視」は沢山の影響をもたらした。非理論的実験的伝統に基づく社会心理学的思考の注入は、社会学的問題の凝集性を浸食するのを助けた。さらにクライアントのニーズは多くのリサーチの方向を指図した⁵。方法自体の精密化はそのユーザーに社会学的传统に、きつと理論に根ざさないアドホックな仮説を用いることを要求し鼓舞した。

スタウファーは良き社会学の一種のパラダイムとしてのロバート・パークの社会的エリアのアイデアの影響下でクリフォード・ショーとヘンリー・マッケイによって行われた非行の成果について考え続けた事実にも拘わらず、彼の仕事はこの変化を反映していた (Stouffer 1950: 359)。ラザースフェルドは、「社会学的問題」は何かというこの暗黙の感覚を共有しなかったし、社会学を厳密なものにするという目標への彼の忠誠心はこの伝統に彼を縛り付けなかった。じつはラザースフェルドにとって、究極的には彼が訓練した社会調査者の多くにとって、経験的作業の領分は、それ自身のルールと理論的学問としての社会学のいかなる個別のビジョンにも左右されない戦略を持つ独自の領分であった。ラザースフェルド自身は主題の極端な複雑性の故に、理論社会学がリーズナブルな目標であるとは信じなかった。せいぜい一種の心理学が自分が行ったサーベイ分析に基づいて構築されるかも知れないと考えていた。自分の仕事の非社会学的性格の任務を自分に背負わせたハーバート・ブルマーのような批判者は、ラザースフェルドには理解不能であろう。というのはラザースフェルドは諸個人についての質問紙研究を経験研究の出発地点として役立つ一種の社会調査とみなしていたからである。

その2：学問改革の必要性

大規模なサーベイとのつながりで発達した技法は何よりもテクニシャンを必要とした。技法に長けた社会学者の訓練が社会学を改良する努力の中でこのコミュニティの戦略上の焦点

⁵ BASR その他のアカデミックな色彩を持つサーベイリサーチ・ユニットがクライアントの要求と折り合うという問題に失敗したのは、このリサーチ参加者によっても強く感じられた。財団事務官とアカデミックスが社会学のためのアジェンダ、さまざまな問題と方法の重要性で一致していた比較的少数のケースでは、対立はさほどシビアではなかった。かくしてこの時期の製品とグラントはのちの研究がたとえもっと資金給付が潤沢であっても到達するのが容易でない業績の絶頂であった。というのは彼らは学問の広がりの中で内部に生じたイシューに関心のあるアカデミックな聴衆、限られた意味しか持たないトピックに関心のあるアカデミックな聴衆と次第に区分された聴衆を相手にしなければならなくなったからである。

となった。社会科学リサーチ^{カウシ}協議会（SSRC）は社会科学に惹きつけられた学生が理系や工学の学生に比べて才能が乏しいという知覚に反応して、社会科学者の教育と補充に関する報告書を委託した。SSRC 事務官エルドリッジ・シブレー（Eldridge Siveley）による報告書は、社会科学に惹かれる最良の学生の比率はリーズナブルだが、理系に比べると社会科学学生の人数の多いことが学生数に対する教員数の芳しくない比率を作り出している^{と指摘した}。そのうえ社会科学の学生の大多数は大学院レベルでさえ、研究者よりも実務家を志向している（Young 1948 : 326）。これらの学生は簡単には転身させられないので、適切な訓練が施されるべき真の研究志向学生からは分離されるべきことが認識された。残念なことに最良の大学においてさえ、研究トレーニングが十分に与えられていないことを報告書は指摘した。SSRC は 1950 年代を通じて方法論のトレーニング資料を準備し、社会科学系の学部学生への数学訓練の増加を促し、計量法の上級訓練の機会を提供する委員会を創設することによってこの欠陥を修復しようとした。さらに社会科学の専門学会の会員の大多数がリサーチの資格を持たない人々から構成されているというおなじみの議論形態を取る、リサーチ基準のつり上げに対する頑迷な固執もみられた。これは、「阻止されなければ、社会行動のリサーチ知識市場の過度の拡張が不可避免的に社会関係問題への科学的アプローチへの信頼を揺るがすに違いない」という恐怖心を培った（Young 1948 : 325）。

無資格研究者の問題は方法の進化の結果であった。ソーシャル・サーベイ運動の時代には、必須のテクニカルなスキルは最小限のものであったので、多くの前途有望な「社会学者」がジョブをしながら学習し、実質的な貢献をしてきた。ラザースフェルドとスタウファーが尽きることなく強調したのは、「今必要とされているのはテクニカルなトレーニングを積んだスペシャリストである」ということだった。結果として教科要件の構築、特に統計学がより一般的となった。1950 年代末でさえ多くの著名な学部は最小限の統計学要件しかみだしていなかった。

不平の上記のリストはさまざまな方向に広げられた。ISRR にいる計量家は早期に気づいたように、新しいスタイルの社会学者は、民衆が自分たちの業績を理解していないし、尊敬していないことにしばしば気づかされた。通常の解決策は自然科学にうまく役立ったので、社会科学に役立つことのできる普及者を呼び集めることであった。普及活動は通常の調査者には向かないことが判明した。というのは調査者が普及のための天賦の才を持たないなら、「彼らは自分の本来の仕事に自己限定し、お互いに内輪に通じる調査報告書を書く方がベターであるから」（Young 1948 : 333-334）。社会学者が社会調査の有望性を外部者、疑いを持つ者に説明するとき、社会学者の語彙の中で中心的に使用される社会工学のアイデアは、次第に厄介者になっていった。というのは、都市プランナーの領域の実務家の養成が次第に広まっ

ており、学生にテクニカルな調査の新しいモデルを教える必要性が感じられてきていたから。もちろん最後にいつでも存在するパトロンの期待、クライアントの期待の問題も存在した。戦後は、特に方法論の基礎調査への資金給付のめざましい拡張をみたが、その大半である大規模サーベイリサーチ組織への資金給付は社会学が認知する目標と容易に調停できないクライアントのニーズと結びついていた。

社会科学の認知する目標についてのプログラムモデル

1940年代と1950年代初めは根本的な方法論争点に関して比較的寛大な時期であった。社会学リサーチ学会（SRA）を導いたシカゴ大学の「事例研究」実践家とコロンビア大学計量家の間の妥協は、ルイス・ワースの死後1950年代半ばまでのシカゴ大学社会学部の「ソフトな」方法を探る人々の追放まで続いた。妥協の公式な基礎のひとつの帰結として、社会学がひとつの「自然科学」であるという合意は、「争点が哲学用語で述べられない」ということであった。リースマンのようなソフトな調査者は、コンフリクトを、社会学の性格をめぐる基本的争点としてよりもスタイルとパーソナリティの観点からみた。そのトピックは社会学の分野で公式のトレーニングを受けていない彼にとっては、ほとんど傑出性を持たないものであった。シカゴ学派とラザースフェルド、マートンの追随者は方法論の争点のタブー視にしたがった。同じ趣旨で我々がすでに見てきたように、スタウファーその他の側にも、1930年代にジョージ・ランドバーク、チャールズ・エルウッドが定式化した方法論の争点に公然と関わることへの拒絶がみられた。方法論争のこの抑圧は十分に結びついた者の間では慣例となり、エリート学科内では特に学問上の価値として制度化されるようになった。マキーバーの『社会的因果性（1942）』の後、上記の学部から方法論論争、哲学論争が到来することはほとんどなかった。ソローキンの著作（1937）は例外であった。戦後期にこの種の著述に取って代わったのは、別の種類のテキスト、プログラム理論の声明であった。

1940年代後半の日付の上記の争点へのパーソンズの定式化はそのビックリするほどの攻撃性の故に特にショッキングである。

社会科学は今はやりのものである。問題は社会科学を作るのではなく作り発展させることである。社会生活の科学的研究は可能かどうかをまだ議論している者ははるかかなたに時代に取り残されている。それはここであり、その事実が議論を終わらせる（〔1948〕1986：107）。

ラッセルセージ財団の長として著したドナルド・ヤング（Donald Young）は同じ指摘を行っ

た。つまり社会科学者の観点からはこれは興味の失せた問題(*dead issue*)である(1948: 334)。にもかかわらずこれらは単なる暗黙の主張ではない。事実科学的地位に対する社会科学の要求の正当性は絶えず攻撃にさらされるか、さび付いた疑念にさらされてきた。NSFの創設をリードしてきた自然科学者達によるプログラム声明に耳を傾けることは、多くの自然科学者が社会科学が科学を装うことを拒絶し、自分たちと仲間になることを拒絶していることをはっきり教える。

社会科学者とそのイシューを論争することを好まなかったスタウファーでさえ物理学者ペルシー・ブリッジマン(科学哲学として「操作主義」の創始者でハーヴァードの光と騒がれた)が1948年の大学院のフォーラム集会で院生達にスタウファーと論争するよう促されたときに、それを論争しなければならないという義務を感じた。ブリッジマンの貢献は、社会科学における数学の有意義な利用は有意義に分析し描写する能力を要求することに気づいたことであった。彼は続けて

有意義な描写は、寄せ集まり、それをめぐってあなたが理論を構築できるシチュエーションの特徴をピックアップする能力である。有意義な描写と理論は手を携える。あなたは他方なしには一方を持ち得ない。それらは互いに成長する(SAS⁶: 6)。

これは、測定の前進の擁護と、社会学の医学型発展モデルで応じたスタウファーか、当時「行為の一般理論」に結びついた共同プロジェクト⁷に参画していたパーソンズのいずれかにとっては、歓迎すべきメッセージではなかった。

この時期に書かれた様々のプログラム声明は様々な点で互いに異なっていた。スタウファーの定式は最も影響力を持ったものではないにせよ、SSRCと財団の周辺のコミュニティの支配的な計量的セグメントの抱く従来の見解の最良の結晶であった。社会科学の目的はまたもや医学との比喻の観点から捉えられた。

ニュートンのあと一世紀の間、疾病の学生は、引力の医学理論に当たる疾病の偉大な原理の探求に惑わされてきた。フィラデルフィアのベンジャミン・ラッシュ博士(Dr. Benjamin Rush)は、自分は一世紀半前に、自分の発作理論において偉大な原理を思いついたと思った。もちろん我々は今は人類の苦痛の多くを征服したのは、ひとつ

⁶ ハーヴァード大学アーカイブス(スタウファー・ペーパー)より

⁷ カーネギー・コーポレーションによって惜しみなく資金援助されたプロジェクトで、このコーポレーションは社会関係学科の研究プログラムに多額の無制約のグラントを与えてきた。

の壮大な概念図式でなく多くの限定された一般化であることを知っている。細菌理論はある疾病に有用で、欠損理論は他の疾病に有用で、心身相関理論はさらに別な疾病に有用であった。いつの日かこれらの理論の総合が見いだされるかも知れないが、パスツールのアイデアはその総合の不在の中でのリサーチと生者の救いに役立ってきた (Reply to Bridgeman 1948, SAS : 6)。

スタウファーは理論的な社会科学の発想を放棄しなかった。実は彼はそれを論理実証主義者に負う用語法で定式化した。当時論理実証主義者はアメリカの諸大学で自分たちの存在を感じさせており、経験主義社会学者の初期の一般化プログラムの、方法論的著述を支配していた理論に対するピアソン流の懐疑とは一線を画した、これからの時代の社会科学のモデルを提案した。ハーヴァード大学総長ジェームズ・ブライアント・コナン充てに彼は書いた。

我々は社会科学の中に、それから実際の状況で何が起こるかを予測しうる、操作的に定式化され、経験的に検証される理論群が発生しうると信じている。我々は社会科学を事実の収集でもなく、常識的アイデアと本来的に検証できない仮説の混合とも、リサーチの便利な用具のコレクションとも見なしていない (Stouffer, Letter to Conant October 25, 1947, SAS)。

「実際の状況」を強調することはある特定の仕方では和らげられる。社会の領域での統計的方法の成功の多くは、「実際問題への科学理論でなく常識の洗練された適用を伴う」 (Stouffer, Letter to Conant October 25, 1947, SAS)。スタウファーはもっとなにかを期待し、アメリカ兵士に関する戦時データの戦後の分析——例えば「相対的剥奪」に関する彼の直感に反する結果——でもっと何かを達成できるのではないかと信じていた。

上記の定式は彼を同僚のタルコット・パーソンズから区別した。パーソンズのプログラム声明は概念的統合の必要に焦点を置いていた。パーソンズは SSRC から、社会科学全体のため、社会科学の展望を説明し、社会科学が公的支援を要求するのを正当化するためのプログラム声明を執筆するように委託されていた。それを委託していた委員会から受諾されず決して利用されなかったこの書類の草稿は、パーソンズはこの時期に他に多くのことを書いていたが、新しいジャンルの好例であった。事実 1943 年から 1953 年の彼が非常に生産的だった時期のパーソンズの仕事全体は、包括的な理論戦略の輪郭を述べ、その戦略の潜在的な豊饒性を証明する予備的な分析を提示する試みからなっていた。これらの著述の一部は出版されたが、他は出版されなかったものの、にもかかわらず社会関係学科、社会関係実験室 —

— パーソンズが彼のアイデアを進めるために設置した管理構造 — の設置に影響力を持った。他の声明はパーソンズの理論的意図の指摘としての価値を超えて意味を持った。それらは、社会科学の特定のビジョンの観点から行為し、彼のビジョンによって引き起こされた有価値の新しい基準を受け入れる有力なオーディエンス（ハーヴァード・ヒエラルキーと研究資金源）に影響力を行使することを真剣に試みた。

パーソンズはのちに1948年のASS大会で紹介されたマートンの「中範囲理論」に集約されるプログラムを自分のそれに対する比較的有益なライバルと特徴づけ、「回顧」の中で、それは「経験的なものと理論的なものを統合するのに不可欠な非常に建設的な動き」であるように思えた」と指摘した(1968: ix)。もちろんマートンはこの声明でパーソンズを直接にないし批判的に扱っていない。パーソンズの公準への哲学的な襲撃に近い。むしろそのプログラム・ジャンル内に留まっている。だが声明の意図された結果は方法論論争のそれに近い。それは調査と理論の現行の試みの認知上の妥当性の代替的評価基準を提供するのに役立った。しかしながら、これらはエリート調査者の共同体、大文字の社会学におけるコンセンサスではなかった。例えばラザースフェルドは経験的な調査と理論とは2つの別個の学問と見なした。人口統計学に志向した方法論者の多くは何らかの形の理論に何の関連も見いださなかった。

その1：サーベイパラダイム：リサーチプロジェクト新モデルとその帰結

ある意味で新しいサーベイの計量的洗練の水準、特にラザースフェルドが市場リサーチから輸入した戦略と質問紙に基づく心理的指標の構築は、複製可能な活動であった。実際無限に複製された。サンプリング理論の技法の発達の結果、経費のかからない小規模なサーベイや既存のデータ群の分析を行うことが可能になった。次のステップは有意検定実施の導入であった。十分に奇妙なことに、社会学でのこの最初の事例は1947年のASR掲載のマートンの論文⁸であった。この実践はゆっくりであるが受容されていった。スタウファーの『アメリカ兵士(1949)』にはそのような検定は見られない。サンプリング検討がその使用を正当化していた1950年代を通じてのBASRの出版物も一般的にはそれを避けていた。その研究所の研究員達はその検定に異議を唱えていた(Lipset/ Trow/Coleman 1962)。

にもかかわらず、その実践はラザースフェルドとスタウファーを取り巻くサークルの外にいる計量を志向する社会学者の間に瞬く間に広がった。有意検定を採用した人々は、社会学以外の分野（農業統計、心理学、主要な州立大学の幾つかにおいてこの時期に設立された統

⁸ R. Merton 1947 “Selected Problems of Field Work in the Planned Community.” ASR 12: 304-312.

計学科)の統計学者との局所的つながりに影響を受けた。人が結果の「有意水準」を容易く計算できることは、少数のサンプルから「有意な」結果を産出することを一層容易にした。予測力の限界の表現として、知見の周りの「信頼区間 confidence interval」を考える代わりに、差という信頼できる知見の強さは、一種の別個の事実、つまり他の母集団、状況に反復できる結果を持つ検定となった。非常に素早く学習されたのは、「有意な」結果が少数のサンプルで容易に産出されうることと、アノミーのような「変数」の「尺度」を用いた新しい「仮説」が容易にでっち上げられることであった。多くの場合、リサーチは興味のある結果と標準的人口統計のカテゴリー化の間に有意な関連を見いだすことに役立つものの、これらの尺度は社会学の理論的伝統と希薄なつながりしか持たなかった。

このモデルの下でなされた典型的な研究は次の体裁をとった博士論文か雑誌論文であった。まず問題の背後にある理論のレビュー(通常は多少とも密接に関連した若干の問題の中で過去のひとりのマスターの関心に若干の注釈をする。あるいはその主題の過去の研究に時折言及する)。次に「仮説」の定式化とサンプル、調査設計、「概念」を操作化する測定法の議論。さらに有意判定をもたらした統計法を付帯した、通常は表で示された知見の提示。最後に知見のリサーチ可能な幾つか含意を述べた結論。

「仮説」は斬新な形をとった。1930年代の統計理論で論争を呼んだ革新は、「是認」というアイデアであった。有意の尺度がある種類の推論の是認可能性の尺度と見なされ得た。典型的にはそのリサーチが検定することを意図され、それが拒絶されると差を持つ仮説の受容を是認する、差を持たないないしは無関連の「帰無」仮説の形をとった。この説明の難点は「実質的」意義と「統計的」意義の関連を混同するかもしくは混同を奨励する点である。この混同の基礎は1934年にスタウファーによって定式化されたアイデア「当該の推論は経験的に存在する母集団全体に対してよりも架空の「母集団」に対してなされたものである」によってしかれた。

この新しい調査フォーマットの普及はめざましかった。この種の膨大な数の計量的研究が生み出され、数年のうちに、「知見」の数、新しい「尺度」、トピックは、特定の種類の保健サービスの消費のような集計パターンが職業上の地位のような「社会的」変数と有意な関連があるという証明を通じて社会学によって移植された。1965年までに、2,500を下らない「尺度」が社会学の文献の中で考案され報告されている。さまざまな方法、サンプル、仮説を査定する技法の陥穽をめぐって膨大な方法論フォークロアが生み出されてきている。

この新しい「標準的社会学」とラザースフェルドとスタウファーの影響下で遂行され大規模サーベイとの歴史的関連は謎である。戦時中スタウファーによって行われた調査への参加者の多くは中西部の者か社会学者として中西部の大学に復帰した者達であった。例えばアー

ノルド・ローズは中西部の有力大学のひとつであるミネソタ大学で経歴を費やした。そこは中西部のよりレベルの下の大学に多くの卒業生を送り出した。ラザースフェルドの教え子はそんなに広くは分布しなかった。1950年代にBASR, ISR, NORCで大規模サーベイの仕事に雇われた社会学者の一部は上記その他のエリート大学の社会学部に就任を獲得したが、たいていの場合彼らはこの時期に数で圧倒していた中西部の大きな学部への就任ではなかった。その上BASRと研究資金グラントによって確立されたリサーチモデルは上記の学部のアカデミックライフの条件に容易に適應しないものであった。博士論文に関わる少数の院生が助手の助けを借りて行う小規模な計量的調査が上記の学部の規範であり、数値的にはプロフェッション全体を支配していた。

この成果で直接ラザースフェルドとスタウファーによって触発されたものはほとんどなかった。「理由分析」はラザースフェルド自身の弟子によってのみ使われた。ラザースフェルドの独自の尺度アイデアである「潜在構造分析」もまたほとんど利用者を見いださなかった。新しい尺度のより平凡なものはたいていチェイピンとその弟子によって先鞭をつけられたものであった。用いられた統計法は非常に多様であった。因子分析、カイ二乗検定のようなノンパラメトリック法、相関分析はすべてこの時期に見いだされる。並みの社会学者にとっては、高額の基金の付いたサーベイの重要性は主として彼らが計量に付与する威信の中に見いだされるものであった。大学の登録の拡張とともに小規模なりサーチはそれ自身の期間に発達した。調査への大学の期待の徐々の変化は上記の社会学者が論文を発表することを不可欠にし、上記の方法はBASRのような組織を悩ませていた費用と組織の問題に簡単な解決を与えた。

この果実の暖かさは成功そのものであった。この新しい調査法は教えて実施するのが容易であるばかりでなく、あまりに容易になされるので、この種の初期の調査は生み出した明快な結果は、差異の中の差異、見込まれる代替物、差異に関して下位母集団間の差異を示した後期の調査によってしばしば曇らされた。

知見の簇生と理論コースで教えられる伝統との関連の欠如の帰結は「理論」と調査の問題であった。方法論のフォークロアの拡大と調査者のランク内の入り組んだ分業の創出は、社会学の歴史で初めて計量的調査者は典型的にほとんど「理論」を知らないし「理論的」野心をほとんど持たないことを意味した。文化変動に関する入念な理論的アイデアを持っていたオグバーン、チェイピンと対照的に、この新しい方法論者は聖典的問題に対する忠誠心を持たず、社会学的文献に特別な知識のない人物から訓練された。ラザースフェルドとグッドマンは顕著な例だが、唯一ではない。例えばバーナード・ベレルソンは訓練によって図書館学者になった者（a library scientist by training）であった。

その 2：理論と調査

理論と調査の乖離は幾つかの形態をとった。大規模なサーベイリサーチ・ショップで訓練を受けた多くの学生の場合には、そのパタンはいかなる理論的文献にも何ら接したことがなく、これらのショップで発達した入り組んだ分業のなかで特化したテクニカルな任務を遂行するよう訓練された。コロンビア大学とハーヴァード大学のプログラムでは、彼らはパーソンズとマートンの見解とヨーロッパの伝統についてのパーソンズ独特の見解を教えられた。しかしこれに先行するアメリカの伝統はパーソンズ、マートンの理論の世界観の一部ではなかった。シカゴ大学では、ハーバート・ブルマーの教えの中でシカゴ社会学の伝統が生き続けたが、彼がカリフォルニア大学パークレー校に社会学部を設立するためにシカゴ大学を離れたときに、エベレット・ヒューズがシカゴ大学を退職したときに、シカゴ社会学の小さな服用は終焉した。それ以外のアメリカ社会学科では、さほど限定的でない仕方で理論は教えられ続けた。例えば、1920年代にチェイピンは多くの思想家のサーベイを教え、この雑多な要素の混じった理論教授スタイルは、ウィスコンシン大学のハワード・ベッカー、ミネソタ大学のドン・マーチンデールによって引き継がれた。

パーソンズとマートンは新しい血、新しいアイデアを代表したが、聴き手によって社会学共同体の中にすでに傑出していた問題に答えた者と受け取られた。我々がすでに述べてきたように、「社会学の諸概念」を総合的に統一したいというユーバンク (Eubank) の広く支持された野心はパーソンズの試みの先駆者であった。マートンと 1930年代のさまざまな他のハーヴァードの研究者 (キングスレイ・デーヴィス、ロビン・ウィリアムズのような) の「機能主義」は一層容易く受け入れられた。次の範例的な「機能主義」の文章を読めばこの理由は容易に理解できよう。

このエッセーはその中枢的社会的機能のひとつに照らして教育を解釈する試みである。教育によって、コミュニティの年長成員による年少世代の訓練を意味する。成人は親として、儀式への参加者として、市民制度の成員として自分の能力の中で教える。上記のケースのいずれにおいても、彼らの活動は社会的サンクシヨンのサポートを持っている。このサンクシヨンは集団の福祉や生存に親和的活動に対する陰に陽にの集団による是認である。集団の成功は一般的に一定の制度と連結しているので、制度を保持することは教育のねらいとなる (Chapin 1911: 5)。

この一般性の水準、集団サンクシヨンの強調、サンクシヨンを行使される「伝統」の再生と保存、説明の究極の根拠としての集団の成功と存続へのアピールは 1930年代、1940年代

にハーヴァード大学に発達した機能主義の特徴である。しかしこの文章はスチュアート・チェイピンのコロンビア大学の博士論文（1911）のオープニングの параグラフである。

深い類似性はたまたまではない。「構造」と「機能」というペアになったタームのような機能主義の用語はギデンクスとサムナーにとって中心的な、すべての初期のアメリカの社会学者にとって重要なスペンサー主義の用語であるから。この同じスペンサー主義は初期の世代のアメリカの社会学者の経験的調査の伝統にも行き渡っていた。というのは、コミュニティ制度の「機能作用」の問題はまさにこれまでの「ソーシャルサーベイ」リサーチの多くがそれをめぐって実施されてきたまさに問題であったから。実際このパトロネジ乗り物はサーベイ調査者とコミュニティリーダーによって共有された「効率」の理念、それはコミュニティの目標の観点から理解された理想によって構造化されてきていた。パーソンズの「ホップズの秩序問題」は協力とその困難という馴染みの問題の別な形態であった。ギデンクスと彼の弟子達はデュルケムとウェーバーを見直したパーソンズと同じく、「経済的個人主義と社会主義の伝統に対する明示的な反抗」であった。

パーソンズの著作と 1930 年代、40 年代のハーヴァードの弟子達の「機能主義」著作 (Davis/Moore 1945) はラディカルな出発としてではなく、アメリカの理論が常に保有してきたものの再確認として読まれた。これはパーソンズの著作が受容された謎を部分的に説明する。というのはたとえば L.J. ヘンダーソン・サークルのパレート主義のような、著作のハーヴァードに局所的なインスピレーションにもかかわらず、パーソンズ主義は当時の支配的潮流の中に容易に同化した。彼の批判者が拒絶したのはヒューマンについての彼のモデル、社会学の彼のモデルでなく彼独特の言い回し、彼特有のメタ理論的アイデアであった。中西部の社会学者は、彼の説明は彼らがすでに持っていたものに内容的には何も付加しないと信じていたから、実際にはパーソンズを無視しながら、パーソンズに快く敬意を払っていた。

パーソンズは彼がのちに「構造的・機能的位相」(1968: xii) と呼ぶもののなかで構造機能主義に加わった。ひとつの違いは、構造機能主義のパートではなかったパレート／ヘンダーソン／キャンノン／ラドクリフ・ブラウンのシステム概念の導入と目的論的理由づけを通じて機能のアイデアを再編したことであった。しかしこれらの付加はパーソンズ主義の最も論争を呼んだ要素であったし、最も厳しく批判された。たぶん最も重要な点は、パーソンズが受け取られている理論的伝統から離れたもの、彼とマートンが正当性を認めなかった理論的著述、彼らが「経験」社会学に行った調停である。

我々が見てきたように、1920 年末までに、幾人かの計量社会学者が社会学から理論をたたき出そうと試みた。しかし科学主義に対するエルウッドの反抗の失敗の中で（それはマイノリティの支配的理想に対する永久の敵意と主要雑誌からのエルウッドの排除を残した）、

依然エリートであった若い社会学者達は科学主義理想に彼ら独自の調停を行った。有力者エルスワース・ファリスの政治的保護の下で、社会科学のSSRCモデルやSRAエリートと密接に連携した学科の中で、ブルマーの1930年代の著述は、トマス／ヅナニエツキ批判(Blumer 1939)の中ではグッドな科学理論の基準(criteria)として「コントロール」を主張した。

パーソンズの調停は表面的には調停と別なものにみえ、むしろ経験主義に反対する新しい営為であるように見えたので、一層特異なものであった。事実彼の擁護者が行っているように、それはパーソンズの意図とはかけ離れている(Litz 1986)。この時期の終わりにパーソンズを「グランドセオリスト」としたミルズの特徴づけがこびりついており、パーソンズ自身が自分を治療できない「理論病患者」と呼称したものの、にもかかわらず彼は彼以前の理論家の多くよりも経験的調査にかなり調停的な理論と調査の関係観を抱いていた。パーソンズの著作を当時の学問内の分業のコンテキストで理解するために、パーソンズの著作の受容を再検討する必要がある。パーソンズ、マートン自身が著している理論的著述と同時代の年長世代と区別する特徴に着目せよ。

ASRが1930年代半ばに創刊されたとき、その雑誌が明確に責任を負った領域のひとつは「社会思想史」であった。それは過去の社会思想家の研究を意味し、社会学の開始時から社会学のカリキュラムの伝統的トピックのひとつであり、そのメンバーの多く、例えばエルウッド、フロイド・ハウス(Floyd House)、ハワード・ベッカー、ハリー・エルマー・バーンズのような人々のアカデミックな専門領域であった。エルウッドのケースが物語るように、上記の著者達は社会思想史を、今日の一般人の社会についての思惟と「科学的」社会理論の試みに適用されうる社会的理由づけに関する教訓が含まれる一連の失敗教義と見なす傾向があった。上記の著者の多くは固定した単一の終点を目指さない、是正と改良の過程を帰結で連続的なものとみた哲学のプラグマティストであった。システムの年齢は過ぎ去るものと彼らは考えたが、過去のシステムは不可避免的に現在を理解するための出発点であった。彼らは科学的な社会思考とバナキュラー(通俗的)なその区別をしなかった。公共の領域と私の領域の関係、合理的国家プランニングの役割をめぐって多くのイデオロギー的板挟みを持つルーズベルトの時代は彼らが詳細に説明する伝統の重要性を正当視しているように見えた。エルウッドの用語では、それは、サムナーとウォードの間の論争の政治的具現であった(Elwood 1938)。

社会行為の主要な「科学的」理論家を基底にある隠れた概念システム仮説を伴ったパーソンズの『社会的行為の構造(1934)』と「社会学的なものの歴史とシステムテックス」に関する1948年の論文でマートンが行った区分は、理論的著述の目的、聴衆、理論のねらいを定義し直すものであった。彼らは過去の理論がそれに反応するニーズの問いに答えることを

強いられた哲学のプラグマティストではなかった。彼らは過去の全範囲の社会思想を無駄で誤ったくだらぬ言明と見なして無視しても平気であった。この態度とバーンズ／ベッカーの『伝承から科学までの社会思想 (1938)』、バーンズ『社会学史入門 (1948)』のようなテキストとの対照性にはもはや驚かない。パーソンズのねらいは彼の系統的なプロジェクトにレリバントな過去の理論の要素を引き出すことにあった。彼はバーンズ、エルウッドが中心的と見なした聴衆（彼ら自身の社会的理想の明確化と見直しの必要を感じた政治的に自覚した聴衆）にはほとんど興味がなかった。

バーンズは特に「学問の」境界のないことを尊重した。1940年まで依然として「社会科学」と呼ばれていたコロンビア大学の学位プログラムの他の製品と同様、彼はさまざまな学問の一員として語り、社会科学の相関関係を強調した (Ogburn/Goldenweiser 1927; Barnes 1925; Beard 1934)。同様にエルウッドは文化進化に関する人類学の著者の強い影響を受け、彼らのアイデアを彼自身の社会学的著述に取り入れた。パーソンズは何か別なものを提供した。1930年代以降の院生に対する彼のアピールの明白な一部であった。社会科学が有力な経済学部によって支配されていたハーヴァード大学の彼自身の状況に反応して、いかなる他の理論的学問によっても共有されない社会学の独自の領域があると述べている (Levine 1980: xi; Camic 1979)。かくして彼の仕事は弟子たちのアイデンティティ形成の手段として機能し、問題の先史についての彼の説明は上記のねらいを共有する人々にプライドの源泉として役立った (Heeren 1975)。

社会思想史の旧来のアイデアと社会学を自然科学のような科学にしたい願望を持つ統計的科學主義とのミスマッチは次第に明白となった。1930年代のチェイピンのような人は平静に自己を理論家と呼び、彼らの方法論観との対立を感じることなく文化変動という当時の理論的問題に取り組んだ。彼らの理論は非公式で適切な統計的技法の持ち主である調査者によって経験世界で識別されるラフな相関に当たるものであった。測定の正確さをラディカルに改良する可能性というアイデアはこの状況を非可逆的なものに変えた。方法論者によって眺められた理論への帰結は次のものであった。理論とは正確に与えられる領域を明確にする手段として役立つ、もっと正確にそしてテストされうる仮説の源泉であった。理論の「理想的」形式は正確さという目標を達成しなければならず、この目標に向けてのステップと見なせない理論はそれゆえ科学的には無縁である。スタウファーによるこの理想の定式はきわめて明白であった。つまり x_2 と x_3 が与えられていて x_1 であるならば、我々が x_4 を手に入れる強い確率が存在する。あとで見ると、パーソンズは1948年の論文「社会学理論の展望」でこの基準化、それとよく似た基準を支持しており、入念な理論スキームを通じて領分を概念的に明確化するという任務を自らに課した。スタウファーはまさにこの種のスキームの必

要性を認めなかったが、物事についてのより一般的スキームの存在が進歩にとって重要なことは認めていた。それがなければ社会学は「事実発見」の営為に留まり、それがあれば社会学は、他の仮説への結果の影響が確定されうる実験になぞらえることができるものを構築できるだろう (Stouffer 1950: 359)。パーソンズ流の理論の営為と正確さを改良する戦略は調停されうるだろう。より旧式の理論は調停し得ないだろうが。

理論のねらいについてのこの新しいモデルは、社会学の分業の標準的描写から「社会思想史」という旧来のカテゴリーを排除することを伴う。実際このカテゴリーの理論はパーソンズの SSRC 提案 (1986) にも、ドナルド・ヤングの社会科学の諸問題とニーズについての特徴づけ (1948) にも、スタウファーによる社会学のねらいらしきものについての解明 (1950) にもどこにも見あたらないのである。実際「学術論文 (learned essays), 記述的報告書 (descriptive reports), 教科書の集大成 (syntheses), 一般向け出版物 (popularizations) (つまり旧来の社会思想史の主要な文字乗り物) よりも科学的論文に大きなウェイトを与える出版物間の監督的差別」(Young 1948: 332) の要求のような改善の中に政治的表現を見いだす積極的な敵意が存在する⁹。

上記の戦略は成功を収めた。その一つの証しは自身を社会思想史家として自認する社会学者の数の減少である。社会思想史家は社会学の一般的拡張にも拘わらず、雇用を見いだすのが難しいカテゴリーとなった¹⁰。旧来のタイプの論文は「科学的」ジャーナルに掲載されることが容易でなくなり、旧来の仕方で理論を研究することを望む著者の多くはこの新しいアカデミックな環境のなかで生き延びるのが難しいことを知った。二流の大学では数人は見かけたが、時間と資源と良質の院生を持つ最も威信の高い学科では、皆無であった。

社会思想史が地下に潜っていった過程は社会学の至る所で平行してみられた。戦後直後財団の基金を得た研究者共同体のメンバーでなかった社会学者の多くはこれらの関係の拘束的効果から隔離され、その結果彼らはハーヴァード大学、コロンビア大学の非社会学者に匹敵するあるいはそれ以上の権利を持つと自らが信じる「通常社会学」の伝統に当たるものを引き続けた。ミネソタ、ワシントンのような大学ではその継続は強く、上記の学部の社会学者の訓練を特徴づける社会学的伝統の保有感覚は、パーソンズ、スタウファー、ラザースフェルド、マートンに恩義を感じなかった。上記の学部は小規模な統計リサーチプロジェクト

⁹ 教科書外の材料の出版機会の増大はこの時期の重要な成果と見なされた。上記の発展にコメントしながらパーソンズは自身の出版社「フリープレス社」が社会学の非教科書出版物のためのマーケットの存在を他の出版社にデモンストレートするのに重要であったことを特記している (1959: 557)。この出版社「フリープレス社」の衰退と 1970 年代初めの多くの他の出版社の市場からの撤退はこの市場の縮小の証しである。

¹⁰ これらの関心を持つ多くの人物は彼らの呼称を社会変動 (研究者) に変えた、社会変動のカテゴリーの増加は部分的にはこの事実の反映である (Zetterberg 1956)。

トとコミュニティ属性よりも個人属性のルーズでアドホックな尺度の創出に向かう初期の発展を継承した。だがたいていこれらの発展は大規模なサーベイワークとは直接の対立はせず、1940年代にラザースフェルド、スタウファー重視が次第に色あせて行くにつれて、ワークスタイルの分岐も次第に間接的なものになった。

グッドマン、ラザースフェルドのような人物が易々と採用になったのは社会学が発展していないことの反映であるだけでなく、彼らの採用は彼らを採用した学部とネットワークの個々の目的に役立った。科学的方法の情け容赦のない宣伝とジョージ・ランドバーク世代を席卷した科学と計量化の一体化は、社会学の範例的方法としてのサーベイリサーチの受容とスタウファーの『アメリカ兵士』のような大がかりなサーベイプロジェクトによって生み出された結果を受容するために不可欠な前座であった。

1940年代末までに、新しい区分が生じた。アメリカの多くの社会学者は学説擁護論にも大規模サーベイ組織の調査結果にも承伏しなかった。もっと多くの者はパーソンズ流のプログラムに印象を受けなかった。1950年代末に上記の態度を攻撃の仕方です式化した幾つかの作品が登場した。その中でも最も有名なのは1958年に掲載された「ユートピアからの脱出」と題するパーソンズに関するダーレンドルフの論文であった。それはパーソンズ流の営為の無駄というアメリカ人の感覚を捉え、パーソンズのアカデミックな立場、アイヴィーリーグと財団共同体の権力に対する彼らの憤懣にはけ口を与えた。それよりもっと重要なのはライト・ミルズの著書『社会学的想像力(1959)』であった。後背地に多くの個人的コネを持つウィスコンシン大学の学位保持者¹¹として、ミルズはパーソンズ、ラザースフェルド、マートンと彼らが代表するアカデミックな階級システムに対する敵対者となったのは当然であった。抽象的な題の下にコロンビアの感覚、特にBASRの民族誌に正確な特徴づけを覆い隠しているこの書物は、ドナルド・ヤングが軽蔑した知的な価値、ミルズが「知的職人精神」と呼称した価値の再確認であった。社会学的想像力のタイトルそのものは1970年代まで中西部の学科に発達した社会学的パースペクティブの強い暗黙の感覚を触発した。それはパーソンズ、ラザースフェルド、マートンの理論的関心、技法的関心とは決して折り合わないものであった。

このテキストの議論は、そのルーツを旧来のアメリカの社会学の伝統とそれからの逸脱にあることを示している。ミルズは当時看取された知的ニーズを考察することから始め、社会学がそれに答えられなかった理由を明らかにしている。社会における社会科学の正しい役割

¹¹ この時期のウィスコンシン、ミネソタ、ノースカロライナのような学部の高い格付けにも拘わらず、これらの大学の院生でアイヴィー・リーグに就任したのはきわめてまれであった。ライト・ミルズは明らかな例外であり、それゆえ後背地の社会学者達のヒーローであった。彼はコロンビア大学の学部生相手のユニットにのみ就任し、大学院プログラムからは排除された。

は、まさしく理性を民主主義に関連づけ、たとえこれが「リアリティについての公式の定義」(1959: 191)に挑戦することになっても、民衆の言説 (public discourse) の一部であることにある。彼が拒絶するのは、ジョン・ギリンのような改革派社会学者の旧来の個人主義偏向であった。その代わりに彼はより大きな社会構造とパーソナリティの関係の理解と統合され、「科学のモデルによってでなく歴史から発生したものとしてのリアルな問題の感覚によって」(1959: 72) 動機づけられた制度比較の歴史アプローチを説いた。方法のレベルでは彼は多元主義を説いたが、方法としての経験社会学の方法には挑戦をしなかった。しかし彼は方法論は科学哲学には基礎をおくことはできないと述べた。当時はやりの論理実証主義は従来型のサーベイ法と機能主義と一種の同盟関係にあるものと見なされた¹²。それに反対してミルズは、方法の前進は「成果の進歩に由来する慎ましい一般化として最も起こりがちである」と述べている (1959: 122)。

ミルズの査定と同じ頃にパーソンズによってなされた査定の間に不思議な相称 (シメトリ) が見られる。両者は1960年代が社会学の10年であったと把握し、大学が潜在的な戦場であったと見ていた。ミルズにとって、それは「適切な民主主義政党と運動」(1959: 191)の不在の中での必然的な舞台であった。プロフェッション (学会) はすでに当時の社会問題と社会学の関係の問題をめぐる分裂していた。農村社会学は1930年代に別個の学会を形成した。1950年代に社会問題研究学会 (the Society for the Study of Social Problem) が多くの社会学者の感覚に反応して創設された。近年ASAと改称されたASSの「専門職化」が貧者と無力な者に伝統的に関心を向けてきた社会学の放棄に至ったという感覚。ASAの専門職に関する委員会の部会長として働くパーソンズにとっては、それは社会学と「一般的文化的非科学的側面」との関係という題目に属するプロフェッションとしての社会学が直面する問題であった。この問題は他の問題と合成される。「ひとつの文化的複合」としての社会学の問題、特に「科学の適合性と客観性という聖典がプロフェッションの作業綱領としてどれだけ設定されているかという問題」(1959: 547)。この合成から2つのジレンマが生じる。

¹² 両者の密接な関係の様相は社会学理論の一卷 (Gross 1959) に掲載された機能的説明の分析を与えた論文 (Hempel 1959) とラザースフェルドとつながりのあったスウェーデンの社会学者ハンス・ゼッターバーグ (彼はコロンビア大学でエルネスト・ネーゲルと一緒にセミナーを持った) のような人物の著述によって高められた。しかしながらつながりの大半 (ラザースフェルド自身を含めて) は表面的なものであった。任意の種類の実証主義者たちが実際の社会学理論と説明を論じている少数の例では、結果はきわめて批判的である (e.g. M. Black 1961)。計量的社会学者の多くは実証主義のメッセージ、特にあらゆる科学の説明と理論は同じ基本論理形式をとるというメッセージを好む。既存の形式の科学的営みに同化しようという実証主義内の動きはその科学的装いを正当化し、理論の重視を基底付けるのに役立つ。しかしながら明白な同盟関係は、従来の社会学方法論に従来の科学哲学批判者が反対したように、1960年代、70年代の論争を形成した。ウインチが最も著名な事例であるが、物理の領域と人間行為の領域を区別することに関心のある哲学文献がそうであったように。

第一のジレンマは社会学の受容特に学部レベルでのそれ。それは主として「一般教育の役割、学生に彼が住むことになる世界に向けて準備するのを助ける役割」(1959: 554)。同時にパーソンズは、これは同調問題への広いイデオロギー的洗礼（ハーヴァード大学の同僚デヴィッド・リースマンのテーマ）によって色づけられると主張する。しかし民衆は潜在的に社会学者を上記の種類の問題の「エキスパート」と定義するだろう。パーソンズは社会学が（経済学について）民衆の注目を集める好機とみなした。

民衆と学部生のこの「イデオロギー」への関心は社会的悪へのこれまでの関心にとって代わるものとパーソンズは感じた。

それは社会学者に重い責任を負わせる。イデオロギーはまさに社会の価値コミットメントとその経験科学文化の合流地である。事柄の性質上、有力な圧力と科学の客観性の基準が対立するようになる（1959: 555）。

この状況に直面して、「議論の広いフォーラムとのすべてのつながりを回避することによって」「撤退」を考慮する「純粋な者」に対して、パーソンズはこれは「ある純粋に技術的スペシャリストにのみ実行可能と見る。プロフェッション全体にとって、それは採用が難しい姿勢である」（1959: 555）。彼の読者が十分気づいているように、上記の学生を方向転換させることは、大学の資源に対する社会学の要求のもとで足下を絶つことであろう。エキスパタイズの需要問題に対するパーソンズの解答は、「さまざまな非アカデミックな組織の中でコンサルタント役割の使用を広げること」と、「医学部、経営学部に社会学者の出現を増やすことを通じて、社会学の応用サイドをもっと適切に開発すること」であった。両趨勢は当時伸びていた「アクションリサーチ」のためのセンターの設立を伴っていたが、養成に際してプロフェッションの最高の基準を要求することが必要であった（1959: 557）。

第4章 黄金期とその後の混沌

【梗概】主としてスプートニク後の政府資金の流入とイデオロギーに関心を高めたベビーブーム学生の流入に反応して、アメリカ社会学は急速に成長した。そのような成長は専門職組織（学会）の再編成への圧力を作り出したが、ASAの会員の大幅な拡大は学会の組織的コントロールの増大も、知的な統合の増大も伴わなかった。実は全く正反対のことが起こったように見えた。ASAはあらゆる見解と会費を納入するすべての人々を傘下におさめようとする組織となった。そのうえ分野はASAの外で急速に分化し、雑誌、個別分野学会、学

科での科目提供の数の増大、ASAからの地区学会の分離によって顕著になった。

この多様化はアメリカ社会学が深刻な統合問題を抱えることが明白になるほどまでに達した。そのような問題はすべての専門職組織同様、社会学に常に存在したものである。しかし社会学においてはそれは特に深刻であった。社会学の目下の状態は分野を統合する当初の妥協が失敗した結果であり、物質的資源が急速に拡大した時に、アメリカ社会学を組織的にもシンボリックにも統一する何らの術がほどこされなかったためであった。第1章から第3章で輪郭を述べた個別の歴史過程にドラマティックな成長が起こったことは社会学を多くの多様な方向に押し出したところの諸条件を作り出した。上記のものが本章のストーリーである。

資源の増大

ソ連が1957年10月4日人工衛星スプートニクを軌道に乗せるのに成功したとき、これまで想定されていたアメリカのテクノロジーの優位は突然疑問符を突きつけられた。続く年月は、この新しい挑戦に応えるのに十分な科学者と技術人員が存在することを確保するためにアメリカの教育システム再建のための劇的な奮闘を目撃した。かなりのすったもんだと論争と妥協と方向付けし直しのあとで通過した国防教育法（The National Defense Education Act）は、政府から高等教育に多額のお金が委譲される乗り物を造り出した（Clowse 1981）。以後のこの法律の追加、修正、増補は続く十年に渡って大学の物理的施設を拡張し、学生院生が自分たちの教育に金銭を払う能力を拡張した。そのうえ連邦機関は自分たちが学生、教員、大学研究施設に渡すことができる資金の大幅な増額を体験した。

ハード科学は大半が上記の恩恵に浴したのに対して、社会科学もまた彼らの支援水準の有意な増加に与ることになった。最終結果は、社会科学一般社会学個別にとって、研究資金給付が私的財団から主として連邦政府の公共機関に決定的に移ったことであった。例えば1956年と1980年の間で、私的財団からの社会科学への金銭は二倍（2,100万ドルから4,100万ドル、変動価値を差し引くと実質マイナス）、連邦政府からの金銭は14倍以上の増（3,000万ドルから42,400万ドル）であった。これらの基金は大学から研究者への金銭の27倍増と組み合わせられたので、新しい物理施設、ファカルティ・デベロップメント、奨学金フェロースhipを通じての学生支援、教員の研究のための多額の資金供給が今や可能となった。さらに私企業と公的機関の双方によって資金給付される契約研究のためのアカデミアの外部市場の成長が起こった。図4.1はスプートニク後の社会学の連邦政府からの研究資金給付の増加水準の大まかな感覚を与えている。

1960年代に社会学の規模を拡大したさまざまな力は容易く仕分けはできないが、研究資金給付の効果は決定的である。研究資金給付の拡張は院生の数を増大させた。図4.5、図4.6

に記すように、社会学の毎年の博士号修士号取得者の数は非常に素早く上昇した。上記の院生の登録は、社会学に大学院プログラムを拡張するために使用されうる人口統計学的な資源を提供した。前述の図 3.2 が記したように、博士学位生産は戦後直後の過剰な拡張のあとの 1950 年代を通じて乱高下している。その過剰な拡張は、十分にトレーニングを積んだアカデミックスを非研究制度（小規模な教養単科大学、教員養成大学、威信の低い州立大学、コミュニティカレッジ）に留めていた。社会学におけるアカデミックなキャリアの魅力はスプートニク以前は低下したが、1950 年代のカレッジ登録者の減少と相まって（朝鮮戦争の勃発が復員兵を消滅させた）、アカデミックなキャリアについて学生達の間には不確実性が存在した。スプートニク後の支援拡張が上記のすべてを一変させ、それがなかったら博士課程を修了できなかった学生のための道を容易にした。

学部生の需要もまた社会学成長のひとつの重要な要因であった。1950 年代に落ち込んだあと、社会学に登録する学生数はゆっくりではあるが、一貫してのほり続けた。社会学への学生の需要のスーパーヒートは 1962 年に始まった。これはベビーブーム世代が大学に入学し始める 1960 年代の半ばから後半の時期の直前であった。図 4.7 はこの時期の学生登録の増加がどんなに劇的であったかを物語る。ベビーブーム世代の人口統計学的要因に加えて、ベトナム戦争がラディカル化したことの影響があった。この戦争は非常に多くのアメリカの家族の生活に入り込んだため沢山の公的議論と正当化を要求した。その上国内問題、特に貧困と民族の不平等がさらなる論争を刺激した。

一般大衆によって社会学者と認知される人々が、新たに問題視される社会的世界の説明者としての役割を引き受けることによってこの論争に加わった。論争は社会学がその勢力拡張に使えるシンボリックな資源となった。一部の社会学者は煽動者、ジャーナリスト的なプロパガンタを流す人、左翼組織への参加者になった (C. Wright Mills)。他の者はテレビのパーソナリティになった。さらに他の者はナショナルなエスタブリッシュメントのためのスポークスマンになった。T. パーソンズは最も目立った。彼はオピニオン誌 *Daedalus* でアメリカ人の生活のさまざまな制度セクターの問題を論じた。Irving Loui Horowitz 達は *Transaction* 誌（のちに *Society* に改称）を創設した。この雑誌はその光沢のある表紙の中に描かれた社会問題を是正することを意図したソーシャルアクションに捧げられた。

民衆の心の中にある社会学者のアイデンティティはこの時期に定着した。彼らのメッセージは次のようなものであった。自殺率の差であろうと、心臓発作率であろうと、犯罪、貧困であろうと、人々の間の差は階級位置、人種のような社会事実との関連で変異する。それゆえ、社会はこれらの差に因果的に責任がある。時には社会学者によって与えられる、時には用意された聴衆によって推論されるこのストーリーのモラルは「国家が介入すべき」という

ものであった。貧困、都市問題、教育改革、人種差別、機会の不平等に取り組む一連の政府のイニシアティブの着手は、これらのプログラムの促進、より一般的には政府支出の拡大と社会学が一体化する民衆の意識に影響があった。ある意味で、社会学は今一度アメリカ世論の改良主義傾向によって提供されるイデオロギー資本に依存していたが、このころには、私的財団からよりもむしろ政府から金を引き出すためにこのシンボリックな資源が利用された。にもかかわらず、その存在が大学管理者からの追加資源の公認として用いられうる学生を惹きつけることは以前のように用いられなかった。

社会学は当時の最も政治にコミットした学生の多くを吸収するアカデミック・プログラムとなった。その上、これらは最も学問にコミットした学生、社会学が今まで惹きつけた中で最良の学生の一部に属していた。図4.7が示すように、社会学登録数は特別な増加を見せた。年次毎の学士号取得者の数は、1965年の15,000（その数字自体10年前の倍以上）から1970年に35,000以上に増加した。大学院レベルでは、Ph.Dの産出は、学部生人口の拡大の比率だけ増加した（図4.5）。

この増加のひとつの帰結は、社会学の学会組織が急速に拡大したことであった。それは図4.8のASA会員の増加に証拠立てられている。社会学は金と学生登録という物質的資源を持った。人種と民族緊張、貧困、戦争、政府による権力の濫用という当時の問題は社会学と関連深かったので、社会学はシンボリックな資源も持った。それゆえ、アメリカ社会学がASSをASAに改組することによってこの時期にその組織資源を動員しようとしたのは驚くに値しない。しかし我々が次第に気づくように、この改組は管理の強化、集権化、コントロールの面での平行した努力を伴わなかった。実際は正反対であった。巨大な知的多様性を奨励し、許容する傘下組織の創出を伴った。

その結果は、アメリカ社会学の創設者がしたような、共通の専門職共同体の感覚かあるいは共通の知識貯蔵庫の周りにシンボリックな資源を強固なものにすることが全くできなかった。1970年代半ばに、研究資金給付、学生登録数、ASA会員数、Ph.D生産数の低落が始まったとき、社会学は、衰退に対処するための、集中管理集中支配という組織資源も持たなかったし、専門職の共通の所属心、知識基盤へのコンセンサス、アカデミック共同体及び素人共同体内での威信というシンボリック資源も持たなかった。衰退期は専門職をひとつの学問としてもっと凝集したコンセプトに動員しようとか再編しようという努力を喚起しなかった。実際には、誰にでも社会学のニッチを与えることによって、ASAの会員を維持しようとした結果、衰退は一層の分化と多様性を鼓舞した。

物的資源基盤の変化

1960年代の社会調査への連邦政府の研究資金給付の拡張は、財団と私的寄付者に関する問題が少なくともある面では無限に単純になったことを意味した。アカデミックな社会学者は主として限られた範囲の自律性と利害をもつことになった。なぜならアカデミック社会学者は今やカーネギー・コーポレーションや私的契約者が時折行使する、社会科学者の仕事を馬のくつわのような支配をしたいという願望をほとんど持たないビュロクラートを相手にするからである。連邦政府の資金を獲得するためにラザースフェルドのBASRのような組織は、誠実な関係を維持したり、自己を売り込む活動を通じて契約を結ぶことに同じ努力を傾注する必要はなくなった。

しばらくのあいだ財団の事務官と確固たる地位にいるアカデミックスの共同体が、パネルでの奉仕と助言を通じて連邦政府資金の分配機構を掌握していた。そのうちに、政府のさまざまな機関で社会調査の支援が広がるにつれて、この権力は広く分配されることになった。多くの機関でグラントの申請（proposals for grants）は、ピア審査を通じて評価が下された。それは専門職の基準が用いられている、少なくともグラントプログラムのガイドライン内で行われた。多くの機関では、政府の管理職の地位にいるかつてのアカデミックスによって意思決定がなされた。かくして基金が分配される仕方は多様であるが、意思決定は専門職共同体の役割を増大させる傾向があった。NSF 米国科学財団や NEH 人文学のための米国研究基金のような「ピュア」な機関を別とすれば、その手続きは直接学問的基準を再生産しなかった。例えば健康調査の領域では審査のためのパネルはトピックで組織され、各領域はそれ自身の仲間を発展させた。これは、特定のスタイルの社会学研究には有利なことがあるが、構成では学際的である。かくしてこれらの機関による社会的プロジェクトのための資金給付は、非社会学者による優れた評価を要求することとなった。それは社会学という学問のハードルと一致しない独特の選択のバイアスを持つハードルである。一般に政府機関より小さい私的財団のパネルは性格的には学問的度合いが低い傾向がある。ここでもまた社会学者からの申請とこれまでの仕事ぶりが社会学以外のアカデミックスに抱かれる評判が成功にとって重要である。それは選択のバイアスがしばしば「指導的な」雑誌に例示される計量社会学モデルと一致しないという帰結をもたらす点で。資金が潤沢でない組織であるが社会学を超えたアカデミック共同体での威信の源泉である NEH のねらいの声明とドキュメントは方法論上の対立を容認する。この機関の大きなフェロウシップ・プログラムに関する社会学の業績のための審査パネルは社会学者を抱えてきたし、今も抱えているが、人文学の方法の使用で名声を勝ち得ている社会学者である傾向がある。

一部の機関、特にこの時期実用性がほとんどないかなりの量の研究をサポートしてきた軍

機関では、グラントを与える職員（海軍調査局）がその機関が関心を向ける一部の一般的領域で仕事をするアカデミックスと築いた個人的関係にもとづいて官僚的でない意思決定がなされていた。その意思決定は官僚ヒエラルキーの下位の者の手に握られていた。これらの人物は間接的に大学の威信ヒエラルキーに体现されている専門職基準を受け入れる傾向がある。社会科学における軍の信念、あるいは費消しようとする意思は侮れないものがある。事実この軍の4ブランチは競って「行動科学」プロジェクトに資金投入を競い、悲惨なプロジェクト・カメロットに導いた。

1960年代の大学院教育への連邦政府の支援の多くは院生の生活支出と授業料のためのフェローシップを含んでいたが、支援の大半は「養成期間グラント」の形をとった。長期の実用価値が見込まれる領域での大学院教育プログラムのための「seed money」を提供する上記のグラントは授業料と生活支出も補助した。

院生への直接の補助は1970年代初めニクソン政権によって導入された科学のかなりの財政緊縮の最初の犠牲者であった。他の削減も直接社会科学、特に社会学をターゲットにしたものであった。この変化の性質は1930年代のロックフェラー援助の汚職事件を思い起こさせた。ピアによる評価に基づく社会科学の基礎研究への財政支援は、個別の社会問題への州の介入手段を見つけることに熱心な精力的な政治家が1960年代に作った有用な結果の約束による承認を常に受けたものであった。金のかかる政府の介入プログラムの結果についての懐疑が高まる雰囲気の中で、その約束は査定し直された。1960年代に社会学者によってなされた仕事はほとんど実用的な価値がないものと見なされた。それはちょうど1920年代後半から1930年代前半にロックフェラー財団の事務官から初期の仕事が不満なもので見なされたのと同じだった。ニクソン政権はNSFによって社会学に廻していた金銭の一部をRANN（ナショナルニーズに適用されるリサーチ）に充てることを提案した。この提案は社会科学研究資金給付に対する監督支配を強める始まりであった。それはNEHのような機関にまで及ぶこととなり、リーガン政権時に人文学のコアの外にある社会学のような学問の資金給付の大幅な削減につながった。他の機関でも、社会調査の支出の割合は削られた。かくして1960年代のブーム時に贅沢に花を咲かせた庭が鋤を入れられたのであった。

アカデミックな評価者の支配下での基礎研究から離れるシフトの直接の帰結のひとつは、連邦政府資金給付の代替源泉の探索であった。皮肉なことに、ファンドのひとつの源泉は社会科学のファンデングの削減理由の一部であった州介入への同じ不満であった。この源泉は連邦政府のソーシャルプログラムの有効性、非有効性を証明したいという願望に具体化された。官庁の記録に基づく計量的証拠を探す官吏（役人）の相性は、社会学者が評価リサーチプロジェクトをめぐる経理会社や他の研究者と競争した時期であった。クライアント中心

の旧式の社会調査のベテランであったラザースフェルドと弟子のコールマン、ロッシは、計量に定位した社会学者によって政策形成者によって提示される公準に経験的な正当性を与えるように設計された「政策調査」のスポークスマンとして登場した。

上記の活動は、ひとつには、これまでの期間に設置された大きな調査ショップに資金を確保するため、ひとつには、1970年代にアカデミック・ジョブ市場の崩壊に直面して社会学者に雇用を供給するために意図されたものであった。これらの試みは、社会科学の資金給付を救うための議会でのロビー活動の試みと同様、ASAの熱心な支持を得た。しかしこれらの試みは、コンサルタント機関に雇われた社会学者の小グループ、適切な設備を整えたショップを持つ少数の社会学者以外には決して適切ではなかった。いずれにせよ、上記の研究契約をめぐる競争という性格は上記のショップには有利ではなかった。むしろそれらが有利だったのは、ビュロクラートと強いコネを持つ、資金給付機関が政治的優先を変更する通りに関心をシフトする能力を持つワシントンに根拠地をおくりサーチユニットであった。結局アカデミックな社会学者はこれらの機関と競争できなかった。その上、契約によって要求される分析の種類は、社会学に独自の計量スキルを要求することはめったになかった。決定の代替肢の帰結の計量的推計を求められたところでは、計量経済学の方法がそれに向いていた。政府のデータの大規模な処理が求められたところでは、経理会社の方が備えに勝っていた。ジェネリックな行動科学リサーチのスキルが求められたところでは、心理学者、統計学者、さまざまな応用領域（公衆衛生）で訓練を受けた人物が十分に備わっており、専門技術を持ったより大きなオーディエンスとうまくコミュニケーションをとることができた。そして一般的には、サーベイ・リサーチ産業の登場がアカデミックな社会学者の特別な貢献を次第に重要でないものにしていった。市場、世論調査員のような社会科学方法の他の利用者は、レリバントな高度の技能知識を開発し行動科学者のスキルに依拠する必要がなくなった。

1970年代初期にその大半が着手されたグラントプログラム決定の大きな集団は社会学の登録に大きな影響を及ぼした。この時期以前に社会学科は残余社会科学として活躍し、老年学のようなトピック、プログラムに責任を負った。1970年代には、刑事司法（criminal justice）の沢山のプログラムが、学生の需要に支持された自立プログラムとなりそうなものにseed moneyとして役立つことが意図された特別のグラントのもとで創設された。非行を犯したものの保護観察と監督に関わる機関は、学位保有者を給与増加昇進にかかりやすくすることによって上記のプログラムの多くを財政援助した。上記のプログラムは数人の社会学者を雇い、社会学の伝統的源泉のひとつから学生を引き抜いた。上記の別個のプログラムの創設は大学院を通じて指導するコースからの学生の喪失を引き起こした。グラントがつけられていないアフリカ系アメリカ人（黒人）の研究、女性研究プログラムは、社会学の外に自分

たちの学問，組織，カリキュラムを開発する際にトピック的なプログラムを追い求めた。これらのプログラムの一部は存続できず，多くの場合当初のインセンティブや seed money が消滅したのと同時にプログラムも消滅した。一部の大学では，刑事司法プログラムは広範囲の公共部門にアクセスを与える一般教育学士号としての社会学のバカロレアの初期目的に奉仕し始めた。まだ刑事司法学士号（criminal justice degree）は犯罪に関わる機関によって好ましい学位として扱われ，その保持者を一般の社会学の学士号保持者よりも有利に位置づけた。

同様の競争は 1970 年のブームの末期に登録の喪失に直面したソーシャルワーク（社会事業）学科にも生まれた。過去にソーシャルワークの養成は大学院レベルでだけ与えられていた。社会学のバカロレアは連邦政府公認の共通学士号（a common federal degree）として機能した。連邦政府によって支援されたプログラム（それは合衆国の福祉プログラムのすべてが含まれる）は，エントリー水準の位置の特化した号を持つ人物の雇用の優先を定めた連邦政府の規制を皮切りに始まった 1970 年代に，ソーシャルワーク学科はバカロレアに専門職の号を認定し始め，学生達を社会学の伝統的構成員のひとつから引き抜き始めた（Bromley/Weed 1979）。学生需要のこのシフトは 1970 年代末の学生的大幅な落ち込みを説明するものではない。にもかかわらず，それらは学生需要が 1950 年代の水準に戻ったことを意味した。社会学のプログラムは多くの学生にとって終着駅ではない。1950 年代にはなかった新しいプログラムが手頃な数の学生を惹きつけている。ようするに 1950 年代への復帰はありえない。今後の社会学の登録はさまざまな学生のミックスに基づかざるを得ないであろう。

組織資源の再分配

ASS と ASA の組織比較，地区学会，個別分野学会の簇生，雑誌の簇生，教えるカリキュラムの拡張（略）

シンボリックな資源の再分配

その 1：機能主義を通じてのシンボリックな統合の試みとその後のカオス状況

モダン時代の開始期に機能主義がかくも成功を収めたのはなぜか。パーソンズ概念図式の内在的なアピールに加えて，機能主義の理想がありふれた説明パターンを正当化するフレームワークとして役立ったことがある。所与の現象の理論的分析は次のような簡単な形式を取った。第一印象に反してその現象がその一部として記述されうる「システム」の大きな「目的」と何らかの関連を持つことを明らかにする。それはそのような説明を発明することが容易であったし，結果を統計的に証明するためにリサーチ・プラクティスの支配的モデルを用

いることが同じく容易であった。「結果」を記録する相関技法に支えられた機能的説明は社会学者に社会生活の非常に多くの領域について述べる常識を越えた何かを与えた。

その方法と理論はある現象に学問的主張をする有用な工夫であったが、その方法も理論も強固にすることなしには増殖し得ないので累積的發展を方向付けなかった。実際所与の現象が社会的機能作用にどのように寄与するかに関する多数の仮説は社会学者が研究したほとんどどんなパターン、制度にも生成され得たが、これらは何らかの種類の機能作用のおおまかな考察が構築されうると仮定される部分説明に過ぎなかった。だが実はそのような機能的説明は往々にしてシステムの目的、要件の用語からの制度の再記述にすぎないものだったし、機能的説明を完了するために多くの異なった「システム」、「目的」、「系統的関連」像が用いられ得ることが明白となった。そのうえオペレーションリサーチ、サイバネテクス、情報理論、自己規制マシンのメタファーの流行がこれらの説明に「科学的」正当性を賦与したが、人々が様々な種類の機能主義者として自らを誇示し始めるにつれて同時に多様性も加わった。それによって上記の択一イメージが決定的に拒絶されるか強固にされる言説手段がほとんど存在しない。せいぜい他の説明が合致することか、より広い事実集合と関連することが証明されるに過ぎない。しかし大てい、説明は排除によってでなく、吸収併合によって変化した。

1959年のキングスレイ・デーヴィスのASA会長演説の時期までは、機能的説明を社会学的説明と同一視すること——機能主義が独自の社会学的説明を代表するというのは神話である——が可能であった。だが上記の自信に満ちた主張が発せられたまさにそのときに、構造機能主義の支配はアメリカ社会学の中で次第に挑戦を受けたのであった。例えば1940年代末にブルマーによって独自の「見地」に転換されたシンボリック相互作用主義は、常識を越えた仕方であらゆる素材を素早い再記述を与えるために用いられる語彙であった意味で、機能主義に似ていた。機能主義のように、シンボリック相互作用主義は教えるのが容易で学生を虜にした。

シンボリック相互作用主義のほかに、1960年代初めに個別の社会パターンによって奉仕される「目的」の特定に関してのみ機能分析としばしば異なっていたものの、マルクス流の分析のひとつのリバイバルがあった。パーソンズ理論に対する「闘争」（理論による）批判が優勢となった。この理論はロックウッド（1956）、ダーレンドルフ（1958）のヨーロッパ人と、少数のアメリカマルキスト（e.g. ミルズ（1959））によってリードされた。上記の批判の中身は多様であったが1960年代に争点は次のようにルーチン化された。批判者によれば、機能主義は現状を擁護するイデオロギーであり、不平等、権力、強制、対立、変動に十分な概念的注目を払わない。その結果は機能主義批判とニューレフトの同一視であった。学生を魅了することによって一時的に批判者を助けるアイデンティティであった。しかし長期的な帰

結は、説明の理想として「変動、権力、対立の考察」を支持するある様式のメタ理論的批判の確立であった。

1960年代が進むにつれ、また「闘争」理論による批判が他の内容批判や論理批判と合流する¹³につれて、パーソンズ流機能主義は熱が冷め始めた。機能主義が衰退を始めると、機能主義批判の先頭にいた旧来のパースペクティブは様々の方向に分裂し始めた。それに加えて非常に様々の新しいパースペクティブも登場した。その最終結果は、機能主義の短い期間の支配のあと、折衷、多様、論争、辛辣の時期がアメリカの理論を特徴づけるようになったことである。

この30年以上にわたって、理論社会学は数多くの方向に動いてきた。ひとつの方向は、個別分野理論の引き続きの繁茂をめぐる展開である¹⁴。犯罪、非行、性役割、貧困、家族、フェミニズム、都市生態学、態度変容、集団力学、人口統計の推移、人格、経済成長、世界システムの力学、社会の革命、帝国の勃興と崩壊、民族関係、階級関係、政治エリート、組織の成長、感情等社会学のほとんどすべての下位分野の構造と過程と現象についての理論である。個別分野理論のこの繁茂はもちろん第二次世界大戦以前の遺産の延長である。それはスペンサーと有機体論の没落のあとアクションアプローチに向かっただけでなく、個別のトピックに関する理論に狭まってきた。

もう一つの方向は、実質的トピックを横断するもっと一般的な統合理論の発達である。これらの理論は包括的であると主張するが、実際には、理論家が自分たちのアプローチはすべての実在を説明し、唯一の適切な理論戦略であると主張するのしばしば行き過ぎである。複数のオリエンテーションの存在が理論統合を達成することの難しさを物語っている。そのうえ、様々のオリエンテーションの提唱者はしばしばお互いを疑いの目で見ている。

さらにもう一つの方向はメタ理論で、これはある意味で現在の理論の多様性に対処する努力を代表している (Ritzer 1975, 1989)。ここでは学者は既存の理論を分析し、その前提、認識論、存在論、形而上学を抽出する。このメタ理論化はすべての理論のための一般的な指針を作り出す試みを伴っている。ある意味でメタ理論は現行理論の断片性と多様性を承認して、その状況を何かをしようと試みるものである。しかしメタ理論家の助言は、しばしばやや曖昧で一般的で、性質が雄弁である (アクトとインタラクションと構造と文化を研究する)。結果としてメタ理論家は主として互いに語りかけ、そこで統合の試みとしては成功を取ってきていない。

残る最後の方向は、既存の理論オリエンテーションを拡張する試みか、より折衷的で他の

¹³ そのレビューとして J.H. Turner 1986 ; Turner/Maryanski 1979 参照。

¹⁴ ターナーは「あなたのお気に入り内容のトピックを取り上げる理論」と呼んでいる (1985)。

理論的オリエンテーションの諸要素を総合しようとする新しい理論的オリエンテーションを作ろうとする試みである。英国の社会理論家アンソニー・ギデンズはヨーロッパにおいてよりもアメリカにおいてはるかに受容的聴き手をもっている。彼の構造化理論は、非常に両立が難しいと思われるアプローチを一緒に束ねる。しかしこの折衷理論でさえ、ギデンズの場合に当てはまるように、すべての実証主義者、彼が借用する卓越した理論家に反感を持つ陣営を作り出す。似た宿命は総合を求める他の人々にも見舞われる。彼らは自分たちのアイデアの不適切な使用によって非難される非常に奇妙な同床の仲間の幾つかのアドホックな連携に何とか敵対しようとする。

上記の最近の総合理論やメタ理論化の今日の人気は何らかの種類の概念的統一の渴望を合図しているものの、これまでの試みは成功を取ってきていない。彼らが転向者を獲得したとしても500~600のかなり小さな集団である。その結果、大半のアメリカの社会学者、特に調査に志向した社会学者は一般理論化からの曖昧で、抽象的で、わかりにくい声明に対して注目を払ってこない。もし彼らがいやしくも理論に目を向けるならば、経験的調査者は一般理論家のより統合的試みよりも狭い理論の方にはるかに幸せを感じるだろう。

ポスト・パーソンズ期は「理論家の理論」と「調査者の理論」の亀裂の拡大をみせた。そのうえ理論内部の多様な仕切りの広がりも見られた。新たな仕切りは内容的コミットメントだけでなく、戦略的、哲学的コミットメントをも反映している。ある者は、人間組織の法則が開発できると信じ、他の者は、人間組織の性質そのものを人間によって変更することができるもの、従って恒常的な法則には従わないと見なす。ある者はメタ理論に賛成し他の者は命題の演繹体系に賛成し、さらに他の者は言説分析に賛成し、また他の者はフォーマルモデルに賛成する。ある者は理論はミクロな過程から始めねばならないと述べ、他の者はその逆であると述べる。それゆえ調査者が彼らの手を理論家に任せ、自分はデータ収集に従事するのは驚かない。

しかし理論と調査のこの分裂は社会学が分化するに留まるだけでなく、知的にも断片化するに留まるだろうことを約束するものである。調査者と理論家はめったに互いに語りかけず、理論社会学内部でも尽きることのない論争がみられる。この状況は、組織資源、物質資源、声望資源の分散によって維持強化されている。例えば、ASAの構造は組織ヒエラルキーに定性的調査より計量的調査への偏向がみられるものの、あらゆる人々をアコモデートしようと努めている。ASA内部には非常に多様なアプローチのための部会が存在するが故に、妥協、総合、コンセンサスを求めることは不要であり、ASAがひとつのアプローチをアコモデートできなくとも、それをアコモデートできる個別分野雑誌と学会が存在する。かくして知的な多様性とアメリカ社会学の組織はお互いに強化しあっている。

理論的アプローチの多様性に反映された資源のこの分散に鑑みれば、アメリカ社会学が自然科学のように理論的に統一されることは無理であろう。本書のタイトルを裏書きする事実である。この多様性のひとつの兆候として、多くの理論家は成熟科学のこの基準が社会学にレリバントすることに疑問視するだろう。アメリカ社会学に知的な統一が起こるとすれば、それは理論を通じてではなく、今世紀の計量的方法の登場を通じてである。

その 2：多変量法を通じてのシンボリックな統一の試み

1960 年代の膨大で空前の院生の登録は社会学者が学生に関してもっと選抜的にさせ、ある程度今まで以上に選抜性が存在したが、この選抜性は特異な分布をもたらした。院生レベルでの選抜がなされる基準が一般的な文化的リテラシーよりもむしろ、統計学の能力となる傾向があった。そのうえテニユアの水準でも同じ種類の選抜が起こった。多くのアメリカの大学はこの時期に相対的な地位の上昇の野心を持ち、「論文を書かなければ消えろ」システムを敷くことによってこれを追求した。これはアカデミック革命の鍵であり、いままで以上にマイナーな大学の教員を全国的な学問基準の影響下に置くことになった。このシステムは著名な社会学雑誌に沢山の論文を載せる能力のある社会学者に有利に働いた。

上記の雑誌のスペースをめぐる競争は統計的業績に非常に有利な新しい現象であった。論文が統計的でルーチンになるほど、主要雑誌に掲載される傾向が強くなった。マイナーな雑誌まで威信のある雑誌を見習いはじめ、その結果社会学の論文は主要な雑誌もマイナーな雑誌も同じ様相を呈するようになった。著者の観点では上記の論文の受諾は批判からより容易に防衛されることになった。社会諸科学の各々において、雑誌のベッキングオーダーが確立され、雑誌はリスペクタブルな掲載記録に野心のある著者とベッキングオーダーのなかでの自らの位置に関心のある編集者の双方によってベッキングオーダーの観点から価値づけられた。

人はかくしてベストな雑誌における統計的性格をもつ成果の比率の急速な増加とこの新しい競争環境の大学院プログラムへの影響の複雑な知的な理由を挙げる必要はない。プロフェッションの中で自らの位置を維持したい防衛者は上記の論文を産出できる若い社会学者を雇い、指導的な大学の院生がこの種の論文を産出できることを保証する大学院要件の変更で賛成した。これらの変更は今度は上記の方法で院生を訓練できる若い教員の採用を要求し、上記の教員をめぐる争奪が一層その要件の極端な増加をもたらした。ベストな雑誌のスペースをめぐる競争の高まりは申請される作品の統計法の洗練をエスカレートさせた。結果として社会科学の大学院教育の統計的内容の増加を訴えた 1930 年代の SSRC の目標は最終的に叶えられたのである。

しかしながら、分野のヒエラルキー的区別と統計的方法への依拠の高まりのタイアップの帰結に複合が現れている。統計の使用、特に社会学を「科学」にする希望を統計学と一体視することに関する、賛成反対する旧来からのイデオロギー的理由が存在する。これらはすでに学部の政治闘争に見られた。1950年代はシカゴ大学で学部の支配をめぐる激しい闘争を見、統計に志向した社会学者が勝利した。1960年代は学部内で統計学の要件をめぐる闘争が繰り広げられ、その社会学への関心が内容的でときに実践的ないし理論的な学生によって不満を抱かれた。かれらはしばしば一致した要求であると知覚されたもののレリバンスに気づくことができなかった。その上、上記の新しい基準に同調しなかった教員はしばしば学科の調和を犠牲にしてそれらに反対した。最も熱心な統計法の支持者は反対を排除し、反対を「非専門的」、無能と定義する野蛮な試みに荷担した。

学科内の政治闘争は社会科学の性質をめぐる論争と批判的文献の創出に寄与した。この批判的文献の大半は「実証主義」の考え方を中心とした。ここに大きな皮肉が存在する。なぜなら科学の道としての統計的方法の信仰という先行物はインスピレーションにおいて元々実証主義ではなかったから。当時の卓越した「実証主義」哲学者であるカール・ヘンペルの標準的な議論は当時の非理論的統計的業績に対する批判として容易に読むことができた。いずれにせよ批判者がすぐに気づいたように、社会学の科学的地位を否定する「反実証主義的」哲学の膨大な意見群が社会学外に存在した。その上、個別の内容的な問題に関心のある多くの社会学者にとって、計量的方法の登場は無縁のもの外部的なものと体験され、ナショナルな学問からの疎外感をエスカレートさせた。当時の基準によって十分に訓練を受けた社会学者ですら、自分たちのスキルが急速に時代遅れになり、自分の分野で最も威信の高い雑誌の掲載論文も近づきたいものになった。

1950年代末に2つの系譜が互いに顔をつきあわせた。ランダムな分布とランダムでない分布間で、典型的には2×2表で差異を立証するフィッシャーの系譜。それと相関分析の復活した形態。サミュエル・スタウファーはかれの最後の著述のひとつで、代替物の近年の歴史を次のように描写した。

過去10~20年の間に、その数学的有利さの一部にも拘わらず、相関のような伝統的な技法の一部からの離反が見られる。付加変数が導入されるにつれて（しばしば各変数をほんの2つか3つの大まかなカテゴリーを持つものとして扱う）連続的にデータを細分したり再細分する方向に向かう傾向が認められる。…

しかしながら、他の方向に向かう別なトレンドも存在する。高速のエレクトロニック・コンピューターマシンの使用の増加がそれである。新しいコンピュータのプログラ

ミングの訓練はいまや我々の院生の多くがもつ体験の一部である。IBM モンスターのひとつは一時間に ASA の相関係数の巨大なマトリックスを産出する。デスク計算では一人の書記が1年を要するであろう (Stouffer 1963 : 74-75.)。

代替肢の第一のものは生み出すことが容易である。要求される技術はカードソーターと計算器である。1960年代半ばになってようやく、学科は学生が博士論文や研究論文のためのデータ提示をメーキャップする数ダースの表を生み出すために、マスターし使用することが期待される上記の工夫を含む「統計ラボ」をもった。学生達はしばしば自分たちでデータを集めた。心理学と同様、「社会心理学」のプログラムを共有する社会学科は、初級コースの学生を質問紙研究の被験者として使用した。学生がアシスタントとして働く研究資金のついたサーベイプロジェクトから得た、他のローカルに生成されたサーベイデータが利用可能で、この材料が典型的な博士論文の主題であった。それはひとつの因果解釈が施される帰無仮説を検証する。利用できるデータは代理コントロールとして働く人口統計学的変数や何らかの社会的バリエーションの帰結である投入変数と産出変数を含む。説明のバリエーションが質問紙の回答に基づいて尺度、宗教、アノミーその他の態度特性が形成される。

従来 0.05 水準で有意として扱われる差異はポール・ミール (1986) が指摘するように、発見が容易である。上記の「テスト」で棄却される帰無仮説はほとんど常に文字通り誤りか誤りであることがリーズナブルに予想される。問題の変数はお互いにあるいは大多数の他の未測定ないし含まれない変数との関連でランダムには分布していなかった。事例の数が多いほど、上記の関連は「有意」となる傾向が強まる。「差異」を発見することは、社会学のプロジェクトではめったに当てはまらないが、人が唯一の統計的にそして因果的にレリバントな変数を同定したと信じる明確な根拠を持たないならば、ほとんど価値がない。驚くなかれ、「結果」は増殖したのである。

サーベイのための研究資金の入手しやすさ、この種の統計法を用いての「結果」の生成の容易さ、データのアクセシビリティ、緩い測定慣行、テクノロジーのアクセシビリティは、この種の業績のための雑誌市場があふれていることを意味する。多くの研究領域において統計方法の沢山の気まぐれが起こっている。この流行は、流行をセットする人物がリーダーシップを維持することができる事実によって助けられるのに対して、中心でない制度にいる他者が追いつくことに努力を投資しても彼らが多額を払って獲得した技能が今では時代遅れなことに気づく。

威信の高い雑誌でスペースを競う競争の見地からは、方法の他の特性がレリバントである。第一に、新奇の統計方法はしばしば文献ではうまく描写されないで、当初は少数学科の少

数の社会学者に限られる。第二に、統計方法は大半の実践的な社会学者のテクニカルな訓練の多くを時代遅れのものにしてきた。さらに方法そのものをマスターするのに必要な投資に加えて、ユーザーはコンピューテーションに必要なコンピュータ技法をマスターしなければならなかった。最後に、完全な利用のためには、統計方法は個人が通常有意なグラントの支援がなければ集めることができないデータを要求する。

これは当初は大きなデータ群を開発するための研究資金にアクセスを持つ大学がそれほど備わっていない大学より有利であることを意味した。しかしその方法の主要な使用は既存データの二次分析であることが判明し、開発は他の様々なトレンドと関連している。例えば、実験社会心理学の一般的衰退、サーベイのコストの増大。

最後に挙げた発展は重要である。社会学にとっての研究資金をめぐる雰囲気はニクソン大統領時代の1970年代に劇的に変化し、その結果個々の社会学者はNORC（国立世論研究センター）のGSSのような集会的に収集されたデータに依拠することを強いられた。上記の新しい環境の下での競争する主要な手段は新しいデータの膨大な収集よりむしろ、既存データ、他の目的のために収集されたデータを分析するための技法の洗練である。成功するためには、人は通常の構造方程式ではなしえない差をつける方法、欠損値を補償する方法を必要とする。そしてこれらの洗練は1970年代1980年代の方法論者を虜にしたものである。

上記の方法の独占は決して絶対的なものでなく、言い換えれば価値をおかれた分析方法は凝集する全体（a cohesive whole）を形成しない。様々な計量的系譜を含むさまざまな方法的系譜が1960年後も生き延びてきている。ラザースフェルドはレオ・グッドマンの分割表法リバイバルは正しい道だと信じたし、ネットワーク分析はブロックモデリングのような短命に終わった沢山の工夫を生み出した。幾つかの仕事は経済モデルでなされてきているし、JMS誌はフォーマルなモデルの成果を発表し続けている。参与観察のような定性的方法は社会学のプレステージの高くないリーチの中ではあるが、生き延びてきている。

組織の略号

- ASA American Sociological Association アメリカ社会学会
- ASS American Sociological Society アメリカ社会学会 1959年にASAに改称
- SSRC Social Science Research Council 社会科学リサーチ協議会
- NSF National Science Foundation 米国科学財団
- BASR the Bureau of Applied Social Research 応用社会調査研究所（コロンビア大学）
- ISRR the Institute for Social and Religious Ressearch 社会宗教研究所
- ISR the Institute of Social Ressearch 社会調査研究所（ミシガン大学）
- NORC National Opinion Reserch Center 全国世論調査センター（デンバー→シカゴ大学）
- NIH National Institute of Health 国立衛生研究所

NIMH National Institute of Health 国立精神衛生研究所
 SRA Sociological Research Association 社会学リサーチ学会
 NEH National Endowment for the Humanities 人文学のための国立基金
 RANN Research Applied National Needs ナショナルニーズの適用されるリサーチ
 GSS General Social Survey 総合的社会サーベイ

文献一覧

- Adorno, T.W./Else Frenkel-Brunswick/D.J. Levinson/R.N. Sanford** 1950 *The Authoritarian Personality*. New York : Harper
- Bannister, Robert C.** 1987 *Sociology and Scientism : The American Quest for Objectivity, 1880-1940*. Chapel Hill : Univ. of North Carolina Press.
- Barton, Allen H.** 1982 “Paul Lazarsfeld and the Invention of the University Institute for Applied Social Research.” in : Burker Holzner/Jiri Nehnevajsa (eds.) *Organizing for Social Research*. Cambridge, MA : Schenkman.
- Black, Max** 1961 *The Social Theories of Talcott Parsons*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall.
- Blau, Peter M./Otis D. Duncan** 1967 *The American Occupational Structure*. New York : Wiley.
- Blumer, Herbert** 1969 *Symbolic Interactionism*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.
- Bulmer, Martin** 1984 *The Chicago School of Sociology : Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Buxton, William/Stephen Turner** 1992 “From Education to Expertise : Sociology as a Profession.” in : Terence C. Halliday/Morris Janowitz (eds.) *Sociology and Its Publics*. Chicago : Univ. of Chicago Press. pp. 373-403.
- Camic, Chaeles** 1979 “The Utilitarians Revisited.” *American Journal of Sociology* 85 : 516-550.
- Chapin, F.Stuart** 1911 *Education and the Mores : A Sociological Essay*. New York : Columbia Univ. Longmans Green.
- Clowse, Barbara Barksdale** 1981 *Brainpower for the Cold War : The Sputnik Crisis and National Defense Education Act of 1958*. Westport, CT : Greenwood Press.
- Collingridge, David/Colin Reeve** 1986 *Science Speaks to Power : The Role of Experts in Policy-making*. New York : St. Martin's Press.
- Converse, Jean** 1987 *Survey Research in the United States. Roots and Emergence 1890-1960*. Berkeley : Univ. of California Press.
- Dahrendorf, Ralf** 1958 “Out of Utopia : Toward a Reorientation of Sociological Analysis.” *American Journal of Sociology* 74 : 115-127.
- Davis, Kingsley** 1959 “The Myth of Functional Analysis in Sociology and Anthropology.” *American Sociological Review* 24 : 756-772.
- Ellwood, Charles A.** 1938 *A History of Social Philosophy*. Englewood Cliffs : , NJ : Prntice Hall.
- Ford Foundation** 1949 *Report of the Study for the Ford Foundation on Policy and Program*. Detroit : The Ford Foundation.
- Fosdick, Raymond B.** 1952 *The Story of the Rockefeller Foundation*. New York : Harper & Brothers.
- Furner, Marry O.** 1975 *Advocacy and Objectivity : A Crisis in the Professionalization of American Social Science*. Lexington : Univ. Press of Kentucky.
- Gross, Llwellyn** (ed.) 1959 *Symposium of Sociological Theory*. New York : Harper & Row.
- Heeren, John William** 1975 “Functional and Critical Sociology : A Study of Two Groups of Contemporary Sociologist.” Ph.D dissertation, Duke University.
- Klausner, Samuel Z.** 1986 “The Bid to Nationalize American Social Science.” in : Samuel Z. Klausner/Victor M. Litz (eds.) *The Nationalization of American Social Sciences*. Philadelphia : Univ. of Pennsylvania Press. pp. 3-29.

- Lipset, Seymour/Martin A. Trow/James A. Coleman** 1962 *Union Democracy: The Internal Politics of the International Typographical Union*. Garden City, NY: Doubleday.
- Litz, Victor M.** 1986 "Parsons and Empirical Sociology." in: Samuel Z. Klausner/Victor M. Litz (eds.) *The Nationalization of American Social Sciences*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press. pp. 141-82.
- Lockwood, David** 1956 "Some Remarks on 'The Social System'." *The British Journal of Sociology* 7: 134-146.
- Meel, Paul** 1986 "What Social Scientists Don't Understand." in Donald W. Fiske/Richard Sweder(eds) *Methodology in Social Science. Pluralism and Subjectivities*. Chicago: Univ of Chicago Press. 315-338.
- MacIver, Robert M.** 1944 *Social Causation*. Boston: Ginn.
- Merton, Robert K.** 1947 "Selected Problems of Field Work in the Planned Community." *American Sociological Review* 12: 304-312.
- 1948 "Discussion." *American Sociological Review* 164-168.
- Merton, Robert K./Daniel Lerner** 1951 "Social Scientists and Research Policy." in Daniel Lerner/Harold D. Lasswell. (eds.) *The Policy Science*. Stanford: Stanford Univ. Press.
- Mills, Wright C.** 1959 *The Sociological Imagination*. New York: Oxford Univ. Press.
- Myrdal, Gunnar** 1962 *An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy*. New York: Harper & Row.
- Nelson, Lowry** 1969 *Rural Sociology: Its Origin and Growth in the United States*. Minneapolis: Univ. of Minnesota Press.
- Oberschall, Anthony** 1978 "Paul Lazarsfeld and the History of Empirical Social Research." *Journal of the History of the Behavioral Sciences*. 14: 199-206.
- Parsons, Talcott** 1937 *The Structure of Social Action*. New York: McGraw-Hill.
- 1948 "The Position of Sociological Theory." *American Sociological Review* 13: 156-164.
- 1951 *The Social System*. New York: The Free Press.
- 1959 "Some Problems Confronting Sociology as a Profession." *American Sociological Review* 24: 547-559.
- 1968 *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*. New York: The Free Press.
- 1986 "Social Science: A Basic National Resource." in: Samuel Z.Klasner/Victor M.Litz (eds.) *The Nationalization of the Social Sciences*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania. 41-112.
- Parsons, Talcott/Edward A. Shils** (eds.) *Toward a General Theory of Action*. New York: Harper & Row.
- Riesman, David** 1950 *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character*. New Haven, CT: Yale Univ. Press.
- Sills, David L.** 1987 "Paul Lazarsfeld 1901-1976." *Biographical Memoirs*. 56: 251-282.
- Sorokin, Pitirim A.** 1937 *Social and Cultural Dynamics*. 4 vols. New York: American Books.
- Social Science Research Council.** 1983 "Research Support and Intellectual Advance in the Social Sciences." *Items*37 (2/3): 33-49.
- Stouffer, Samuel A.** 1950 "Some Observations on Study Design." *American Journal of Sociology* 5: 355-361.
- 1963 "Method of Research Used by American Behavioral Scientists." in Bernard Berelson (ed.) *The Behavioral Science Today*. New York Basic Books. pp. 65-76.
- Stouffer, Samuel A. et al.** 1949 *The American Soldier*. Princeton, NJ: Princeton Univ.Press.
- Turner, Jonathan H.**1985 "In Defense of Positivism." *Sociological Theory* 3: 24-30.
- 1986 *The Structure of Sociological Theory*. 4th ed. Chicago: Dorsey Press.

- Turner, Jonathan H./Alexandra Maryanski** 1979 *Functionalism*. Menlo Park CA : Benjamin Cummings.
- Young, Donald** 1948 “Limiting Factors in the Development of the Social Sciences.” *Proceedings of the American Philosophical Society* 92 : 325-335.
- Zetterberg, Hans L.** 1956 *Sociology in the United States of America : A Trend Report*. Paris : UNESCO.

訳者あとがき関連

- Bulmer, Martin** 1994 “The Institutionalization of an Academic Discipline.” *Social Epistemology* 8 : 3-8.
- Camic, Charles** 1994 “Reshaping the History of American Sociology.” *Social Epistemology* 8 : 9-18.
- Demerath, Jay** 1994 “Nineteenth Century Visions and Twentieth Century Realities.” *Social Epistemology* 8 : 19-25.
- Schuman, Howard** 1994 “Possible Science, Impossible Discipline.” *Social Epistemology* 8 : 27-33.
- Turner, Jonathan** 1994 “Further Reflections on Sociology as ‘the Impossible Science.’” *Social Epistemology* 8 : 35-40.
- 1998 “The Disintegration of American Sociology.” *Sociological Perspectives*. 32(4) : 419-433.
- 2006 “American Sociology in Chaos. : Diffrentiation without Integration.” *American Sociologist* 37(2) : 15-29.
- Turner, Stephen** 1987 “Cause, Measure and the Underdetermination of Theory by Data.” *Revue internationale de sociologie* (Nouvell series) 1(3) : 249-271.
- 1994 “The Origins of ‘Mainstream Sociology’ and Other Issues in the History of American Sociology.” *Social Epistemology* 8 : 41-67.
- 2005 “High on Insubordination.” in Alan Sica/Stephen Turner (eds.) *Disobedient Generation*. Chicago : Chicago Univ. Press pp. 285-308.
- 2014 *American Sociology : From Pre-Disciplinary to Post-Normal*. Palgrave Macmillan.

【訳者あとがき】

訳出したのは、1990年刊行、Stephen Turner と Jonathan Turner 共著の Sage 出版、*The Impossible Science. An Institutional Analysis of American Sociology*. の第3, 4章である。訳出した部分は太字の箇所である。ただし4章は部分訳である。ボリュームにして200頁のうち74頁にあたる。

Preface

Ch.1 The Academicization of Reform : American Sociology Before World War I

Ch.2 The Focused Replaces the Grand : American Sociology During the Interwar Years

Ch.3 The New Optimism : American Sociology After World War II

Ch.4 The “Golden Era” and Its Aftermath : American Sociology Today

Ch.5 Possible Sociologies, Recalcitrant Worlds : Conclusion

本書は、アメリカ社会学は創設以来決して安全な資源基盤を持ったことがなく、絶えず変化していること、その結果アメリカ社会学はシンボリック、組織的、物質的に自らを固めたことがないことを明らかにしている。アメリカ社会学史の初期においては、コロンビア大学とシカゴ大学の社会学科が支配したこと、1930年代の大恐慌が教員のリクルートメントに与えた影響、第二次世界大戦前の社会学の珍しい年齢構成、すなわち創世世代の退職、死去によって非常に若い世代がリーダーシップを握ったこと、スプートニクショック後15年間に大量の研究資金の流入、社会学登録者数の急増、70年代以後の学生の反乱、社会学人気の低落混迷と続く内容が興味深く語られている。

アメリカでは本書の書評シンポジウムが行われ、非常に反響を呼んだのであるが、日本で本書に触れたものを訳者は寡聞にして知らない。シニアオーサーのジョナサンは、1974年初版から7回も版(2012)を重ねる現代社会学理論学説のテキスト(*The Structure of Sociological Theory*)の執筆者でよく知られている人物であるだけに不思議である。

訳者がこの部分を訳出箇所を選んだのは、戦後直後から60年代までの興隆と、70年代から80年代半ばまでの瀕死の状態までを扱っているからである。興隆を扱った部分は、ハーヴァード大学のパーソンズ、スタウファー、コロンビア大学のラザースフェルド、マートンに焦点を置いて扱っている。

シニアオーサー ジョナサン・ターナーは1942年生まれで、1968年にコーネル大学から博士号を受け、1969年より現在までカリフォルニア大学リバーサイド校教授である。ジュニアオーサー ステフェン・ターナーは1951年生まれで、1975年にミズウリー大学から社会学の学位を受け、1975年より現在までサウス・フロリダ大学に勤務、1987年に大学院教授(哲学担当)に昇格している。

本書の出版のそもそもの発端は、ポーランドで(ポーランド語)で各国社会学史シリーズを出す企画で監修者からアメリカ編の担当を依頼されたジョナサンが、方法論、調査史の部分をステフェンに依頼してきたことである。ポーランド版の単なる英訳でなく、それと別にアメリカの読者向けに書き下ろされたのが本書である。

両者の分担、どこの章は主に誰が執筆したかいつさい明示されていない。しかし推測はできる。ジョナサンには、本書の縮刷版のようなアメリカの社会学史についての論文がある(Jonathan Turner 1989, 2006)。本書の分析枠組みのバックボーンである、物質資源(財団研究資金の給付、学生院生の入学者数)、組織資源(アメリカ社会学会、大学の威信ヒエラルキー)、象徴的資源というフレームはジョナサンのものであることが、そこから把握できる。

ステフェンの担当箇所は、彼の自伝 (Stephen Turner 2005) に、方法論、統計分析家、計量分析家の部分をジョナサンから依頼されたことを述べている。さらに本書の誌上合評会で 4 人のコメンテーターの書評に執筆者を代表して応答している。ジョナサンのリプライは短く、コメントに反論はなく、自説の補足に留まる短いものなのに対して、ステフェンは長文のリプライを寄せ、この書物の隠れたメインメッセージと 4 人のコメンテーターの注釈に詳細に反論している。あたかも彼の単独著作の観がある。

書名の「不可能な科学」という言葉が何を指すか。それはアメリカの社会学の歴史が科学理論になろうと目指したが、それが挫折してきたことを伝えようとするのが趣旨であるが、わたしはいまひとつ、概念定義、分類、記述段階にとどまる社会学を、科学的理論を持つ段階につり上げようとする、つまり自然科学にあやかろうとするジョナサンと、その悲願達成は土台無理と判断するステフェンの不協和音を暗示しているものとしても受け取る。ジョナサンは、社会学の知識の累積、原理法則の抽出、その工学的利用を目指している。ステフェンは社会学が自然科学のようにはなれない、また目指してもできないからあきらめるべきという立場である。不可能な科学という題は、ステフェンの主張を述べたものである。ステフェンは、ジョナサンの目指す、ゼッターバーグ、ホームズ、ブラウ、バーガー地位衡平論等の命題、変数、相関の定式化をカリフォルニア大学派理論構築 (カリフォルニア派実証主義) を批判する論文の著者でもある (Stephen Turner 1987)。ジョナサンの知識の累積化、理論原理の開発の概要については、拙稿「ジョナサン・ターナーによる社会的実践における社会学理論の応用」(東北学院大学教養学部論集 154 号) がある。これはリッツァー編「社会学理論の百科事典」所収のチャールズ・パワース執筆項目「ジョナサン・ターナー」とジョナサンの「理論と調査と応用の連結」の試論 (1998, 2001, 2008) を適宜抜粋して編集したものである。

ステフェンについては、アメリカの戦前の社会学者、特に社会統計学 (因果性、相関分析)、計量社会学 (測定) に精通している印象を持っている。有機体論、目的論、機能主義についても、社会科学哲学の発展史から考察している。ステフェン論文の唯一の邦訳として、拙稿「沢山のアプローチがあるが、成果は少ない—マートンとコロンビア学派の理論構築モデル」(東北学院大学教養学部論集 163 号) がある。これは、ラザースフェルド、マートン、ゼッターバーグ、サイモン、ネーゲルら 50 年代のコロンビア大学学者サークル (その薫陶を受けた弟子達のコロンビア学派と別) を批判的に考察したものである。

本稿の原稿締め切りまで 3 週間の時点で、ステフェン・ターナー著 *American Sociology: From Pre-Disciplinary to Post-Normal*. Palgrave Macmillan 出版が刊行された。この書物は *The Impossible Science* の続編として位置づけられている。前著が 1990 年の刊行で、それから 25

年が経ち、その後 25 年のアメリカ社会学の動向を追加している。前半では前著の内容をステフェンが単独で新たに要約し、後半が 90 年以降の動向の描写である。下記に掲載目次の太字部分が前著にない内容を扱った部分である。この 25 年は、80 年代半ばに瀕死の重傷を負った社会学が持ち直し、学部、大学院の社会学専攻登録者が男性より、女性が圧倒的に多いこと、女性の博士学位取得者が増えたにも拘わらず、大学の教員になる比率はそんなに増えないこと、ASR, AJS に掲載されるフェミニズム、女性研究者の論文掲載率がきわめて低いこと、それが女性研究者の団結をうみ、旧態依然たる学会、学部に変革を迫る圧力になっていること、エリート大学（トップ 20）ほど旧態依然たる傾向が強いことが述べられている。

Introduction

Ch.1 Pre-Academic Reformism and the Conflict between Advocacy and Objectivity until 1920.

Ch.2 The Revolution of the 1920s and the Interwar Years

Ch.3 The Postwar Boom

Ch.4 The Crisis of the 1970s and Its Long-Term Consequences

Ch.5 The Near-Death Experience and Its Consequences

Ch.6 Feminization, the New University Environment, and the Quest for a Sociology for People

Ch.7 The Elite and Its Power

Ch.8 Activism, Professionalism, or Condominium ?

本訳稿がきっかけとなって、90 年の共著、14 年のステフェンの著書への日本の社会学者の関心が呼び起こされることを祈念して、擱筆することとする。

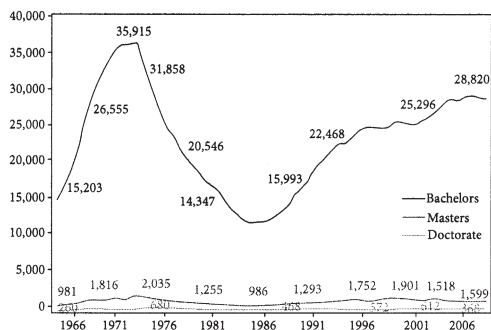


図 5.1 社会学学士号修士号博士号取得者数, 1966-2009 (2014 : 57)

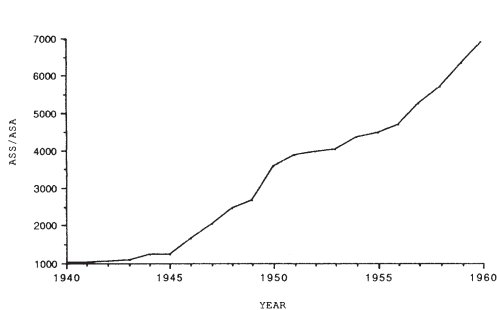


図 3.4 アメリカ社会学会会員数 1940 年から 1960 年まで (p. 89)

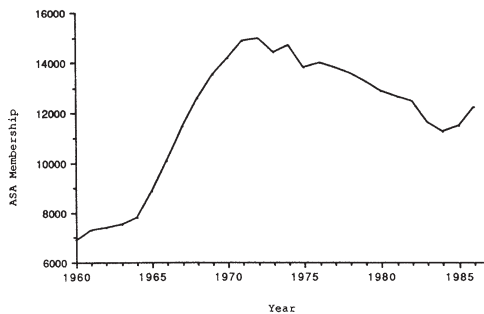


図 4.8 アメリカ社会学会会員数 1960 年から 1987 年まで (p. 141)

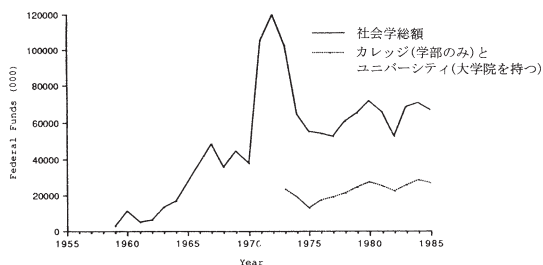


図 4.1 社会学への連邦政府からの研究資金給付額 (p. 135)

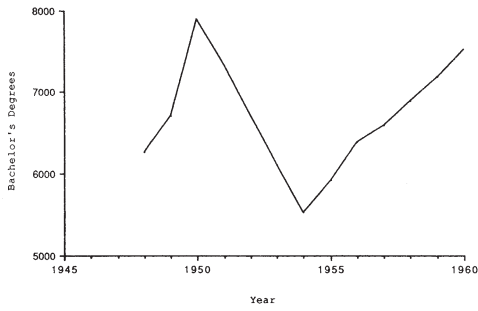


図 3.1 社会学学士号取得者数 1945 年から 1960 年まで (p. 86)

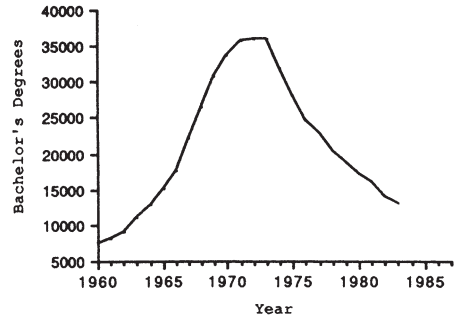


図 4.7 社会学学士号取得者数 1960 年から 1983 年まで (p. 141)



図 3.2 社会学博士号取得者数 1945 年から 1960 年まで (p. 87)

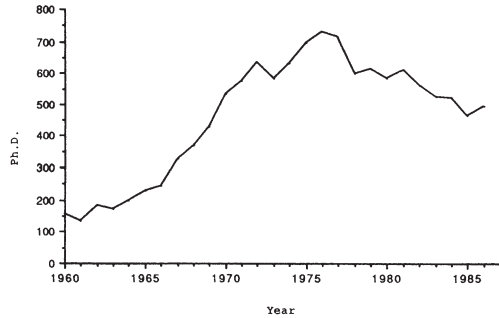


図 4.5 社会学博士号取得者数 1960 年から 1987 年まで (p. 139)



図 3.3 社会学修士号取得者数 1945 年から 1960 年まで (p. 88)

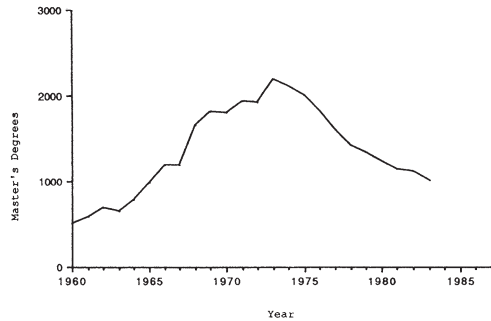


図 4.6 社会学修士号取得者数 1960 年から 1983 年まで (p. 140)